

第11回全国バス学習研究会

集団の中で、ひとりひとりを伸ばす授業の創造を
めざして

—授業の相互作用を強化し、効果高める機器利用の方法—

姫路市立城南小学校

はじめに

○今日教育の現場で、最も大きな問題は、
“おちこぼれをなくし、ひとりひとりを
伸ばす”ためにはどうしたらよいかとい
うことである。いきいきとした学習、ひとりひ
とりがかいつばいできる学習、ひとりひ
とりにほほしもなく全員が協力してできる
学習は、どうすれば生み出すことができ
るか。私達は、現体制の中で少しでも改
善できるところを見つけ、理論としてだ
けでなく、実践として解決の足跡を残
していきたい。そこで私達は、もう一度
“人間とはどうあるべきか”を問いた
だし、人間教育の真の姿を求めて、どの
ような場と技術と教育方法を創
造すべきかを考えながら、日々の
実践を積み上げてきた

I 私達の求めている
学習指導
—城南の教育—

教育目標

- かけがいのないわたしたちです
心をこめて学習しよう。
- 心や体の悪いところを直し、気
力や体力を養っていこう。
- いたらなさに気づき、感謝の心
を育てていこう。

指導の重点

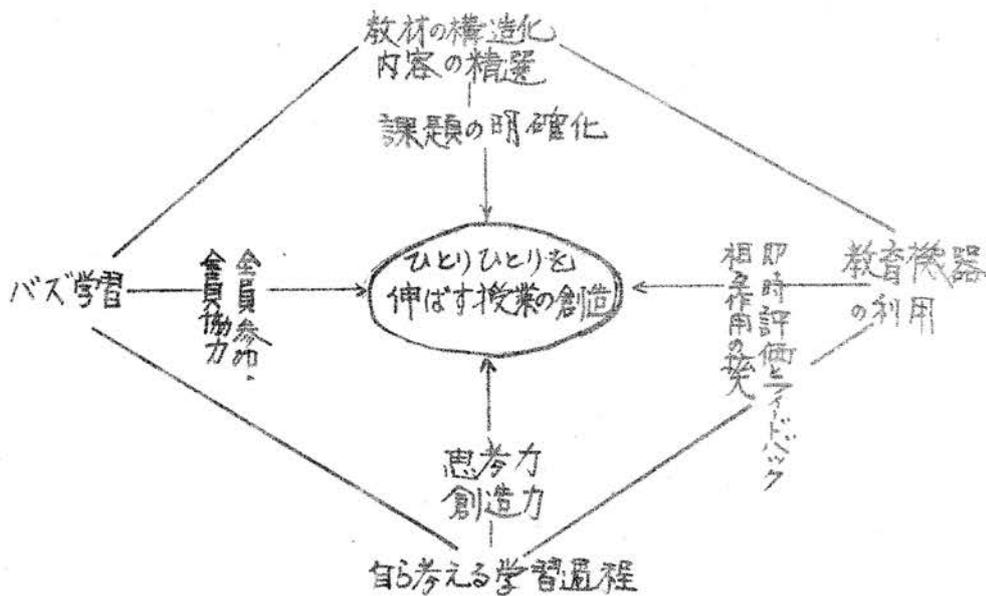
- ① 教材の精選構造化をおしため
て、児童を意欲的に学習に取り組
ませ、学習の定着化をはかる
- ② 集団のなかでひとりひとりを伸ば
す学習指導法の改善をはかる。
- ③ 教育機器を活用して学習の個
別化と個性化を図るとともに相互
作用の効果を一層たかめる。

II 指導方法改善の具体的 とり組み

ひとりひとりを伸ばす授業の創造をめざして学習指導法を改善していくため
その方略として、次の4点に焦点をめて研修と実践を進めた。

実践内容

- (1) 教材の精選構造化 ----- 教材研究 (指導の引き) (学習のほり)
課題の明確化 - 評価
- (2) 自ら考える学習指導 ----- 学習の方法の学習 創造力、思考力の育成
- (3) 小集団の学習の導入 ----- 人間形成 全員参加の学習
(バス学習) 個性の伸長
- (4) 機器の効果的利用 ----- 学習の個別化 評価と
相互作用の強化 > フィードバック



Ⅲ 効果的な機器利用と 授業

(1) 機器利用の基本的立場

- 機器の使用によって授業の効率をあげ、学習の個別化をはかれるには、綿密な学習計画を立て、それにむづいていつ、どんな場面で、どんな機器をどう組み合わせればよいかということも十分に検討されねばならない。
- 機器は先生(学習者)の道具である。機器が先生(学習者)ではないから単に機器を使用しから必ず授業の効果があがるとはれない。
- 学習指導過程の立案の時、どんな目的で、いつ、何をするかを考え、それぞれの機器の特性を十分ふまえ、最適な活用を考えねばならない。それによって相互作用も一層効果があがる。

(2) バス学習と機器利用

- バス学習は、人間関係や集団過程を最も重視した教育である。

これを實現すべく

- 学習指導過程(学習課題の構成と提示——課題の取り組みの援助——学習効果の判定)において、相互作用の

強化、拡大が最も發揮される位置、又機器を使えば一層情報の提示が効果的で、課題づくりやその解決が児童容易になり、自らの力で学習していくような最適化をねらった位置づけで使用されねばならない。

- 学習者の知りたこと、やりたこと、認められたりと思う気持ちやそれが行動や態度に具体化される場を十分つくる中において機器を使用すれば一層相互作用の強化がなされる。

このような利用において、はじめて機器が人間のあたにかい機器になる。

(3) 学習指導過程と機器利用の場

学習指導過程	機器利用の場	機器	学習形態
課題の 構成と提示	・事前調査(ヒド休ス)-----	A N	-斉→個人
	課題構成のヒント 課題の提示 — 疑問 } 課題の確認 -----	V.T.R. O.H.P. S.L. A N	-斉 個人→グループ
↓ 課題の とりくみ	課題の見通しをたてる 解決の方法 解決のヒント(資料提示) データ集の 記録のまとの 達成度の確認 -----	O.H.P. VID V.T.R. 16mm OHP S.L. A N	個人→グループ ↓ -斉 個人
	まよりの説明(補足)	OHP, VTR.	-斉 グループ
↓ 学習効果 の判定評価	学習の理解度(事後調査) 学習の参加度	A N	個人

IV 記念教室の設営

バズ学習と教育機器利用の
実践の場

・最新の教育機器を集中的に導入し
機器の適性を総合的に活用をは
かり、いつでも使用できるといふ便利
をはかった。更に児童机は4人ゲ
ループとし、バズセッションがしやす
い設営にした。

設営のねらい

◎教材、資料や問題提示の即
時性と視聴覚化

◎情報交換の多様化と強化

活用機器

・教材提示装置+VTR+TV(4台)

・トラパオンシアター+OHP(2台)

・VTR+TV ・スライド ・16mm

◎教師と児童をつなぐホットライン

◎学習目的の評価とフィードバック

(4)

VID(情報提示装置)

◎ 個人の診断とフィードバック
(学習の個別化)

即時評価 — 即時修正、治療

使用機器

・アナライザーと記録装置

今後の問題

記念教室(機器を整備した教室)をつくり、機器の活用と指導法(バズセッション)の改善に取り組んでいるが

まだまだ未開拓の部分が多く、今後とも一層の研究と続けたい。特に次の点に重点をおく

- ① 機器の特性を知り、その技術と活用を習熟する。
- ② ソフト面の開発
資料作り、授業づくり。
- ③ 機器の有効な利用の
実践的研究
授業を通して検討する。

生徒の自主的主体的学習を

めざした復習バズ

寝屋川市立第四中学校

はじめに

“子どもにわかる授業” “子どものゆがいや立場を大切にした学習”を希求するのは我々教師として当然のことである。しかし、ややもすれば、授業の方法論、教材の精選、教育機器の導入さらには“教育とは何か”といった教育論めいたもので、いわば生徒不在の教師サイドで論じられている場合が少なくない。もちろんこういうことも大切である。“学習するのは生徒である”という大原則を忘れがちなという現実も看過できない。生徒ひとりひとりの個性の伸長、能力の開発を期待するならば、教師が教師だけがいかなる巧妙な教育技術を駆使してもそれは教師が敷いたレールの上に生徒を強引にのせようとしている努力に他ならず、生徒が自主性を持って主体的に学習しているといえない。生徒の自主性、主体性の高い学習はかならず落ちこぼれ

の生徒、つくっているのである。こういう状態の中では、生徒が宿題をやっけてこないのも、教師が期待しているような学習成果が得られないのも当然である。にもかかわらず、“学習意欲に欠ける” “復習をしない”といったあたりか、学習成果の不十分さの責任を生徒にのみ帰するよう言葉を、我々教師がすぐ口にする傾向があるならば、大いに反省すべきである。

生徒の日常生活をながめた場合、一たび教科学習をはじめた時、生徒ひとりひとりが、何をやるにしても、創意工夫をこらし、生き生きと活動している。ごく自然のうらに、グループで、学級で、お互いが仲間として尊重しあい、高めあいながら生活しているのである。このエネルギーは、必ず教科学習面にも転化できるはずである。そういう気持ちもあって、我々は小集団学習に取りこんでいった。

我々は学習は遊び(主体的によることである)。つまり誰もが主体的に楽しんで取りくめる様な学習でなくてはならないと考えている。そういう視点のもとに、現在本校では、学習と生活の契合をねらい各教科において小集団を導入し、かつ一日の集約として、家庭学習のつなぎとして第7限を設定しているのである。

特設バズ(第7限)

わたしたちは学習(学問)を ① 理解 ② 記憶 ③ 訓練 ④ 研究 ⑤ 実践 の五段階にわけて考えている。①～③は、小、中、高において最低到達しなければならぬ目標(習慣づけ)と考えているが、第7限における生徒の自主的、主体的学習の場においてもこのステップを尊重した方法をとっている。第一段階の理解がたとえなしたとしても、第二、第三段階へと移行できるものでなければならぬ。第二、第三段階は中学校においては家庭学習のあり方にかかわることを考えれば、第7限は家庭学習のかかわりに大きな意味をもつのである。

第7限のすすめ方

a. バズノート

現在、生徒各人にバズノートを持たせている。今後更に改良していかねばならないと考えているが、形式は次のようなものである。

__月__日__曜日			
班目標		自己評価	
< >の要約 <div style="text-align: right;">自己評価()</div>		①	
< >の評価問題 <div style="text-align: right;">自己評価()</div>		②	
家庭学習の課題		反省	

- ①. 班目標は毎日朝の短学活のとき、班できめる。終礼時自己評価する。
- ②. 教科の自己評価は、◎ ○ △の三段階で記入する。

一週間に一度担任は、バズノートを点検する。

b. 7限の流れ

① 教科班によるまとめ。

教科班の代表(二人ぐらい)が前に出て、授業のポイントを板書し、解説する。同時に質問があればうける。
(教科班は事前に教科担任との連絡を密にし、指導助言をうけておく。)

② 各班における班学習。

教科班の指示した方法で学習する。

③ 教科班における評価問題。

前日の教科班の要約にもとづいた評価問題を板書。

④ 個人学習。

個人で問題解答。

⑤ 教科班における解答解説。

⑥ 班学習

班において、再確認、理解不十分な面においては相互扶助。

⑦ 家庭学習のポイント確認。

⑧ 担任、教科担任による評価。

まとめと課題

自主的、主体的な学習をめざし、第7限を実践しているが、単なる家庭学習のつなぎとしての役割だけでなく、第7限の復習バズを通じて、今まで、学級内に埋もれた存在の生徒(お容さん)にも活動の場面が設定されることによって、何事にも、すべての生徒が意欲的に取りくみつつあることも見逃せない。

元来、中学生という時期は、親や教師よりも仲間を大切にす時期であり、7限の充実とともに、より次元の高い仲間へと成長しつつあることも事実である。このことが教科学習の面のみならず、学級経営、学年経営、生徒指導、生徒会活動、等学校生活のあらゆる面が、よりスムーズに運営されていくように思われる。今後、第7限を通じ、小集団学習を通じ、また個人ノート、班ノートを活用する中で、個人と集団のかかわりを、さらに大切にしていきたいと思っている。

もっとも現在浅い実践であるが、克服しきれていないいくつかの問題がある。そのいくつかをあげてみよう。

①. 評価問題の中味を充実するにはどうすればいいか。

②. 最低辺見(読み書き、かけ算の丸丸すらできない子)の指導をどうすべきか。

③. 隋性を防ぎ、常に新鮮な厳しい気持ち、態度で班学習を進めるにはどうしていくべきか。

等、あげることができる。いろいろ工夫は試みているものの完全な解決方法はみいだせずにいる。経験豊かな先進校の実践に学びながら、今後さらに本校としてのよりよい復習バスのあり方を研究していきたいと思っている。

朝の短学活の利用について

小集団学習の充実にともない、最初教師が作成していた小プリントの問題練習に重点をおいていた朝の短学活(職員朝礼の時間)の時間も、各教科班が中心となって、各教科の学習を行なっている。今まで各班において教科のまとめなどいろいろな掲示物を作成していたが、学級一人一人が十分活用しきらず、ただ室内装飾的な役割しか果たしえなかった場合も少なくなかった。そういう反省のもとに短学活とク限、そして掲示物を一つの流水としてとら

えようと試み、現在つぎのような方法で短学活を行なっている。

短学活の流れ

①. 各教科班が、ク限で実施した要約評価問題を基本にし、各教科担任から提示された問題集を参考にして、もぞう紙に問題を書く。

②. 短学活の時に、そのもぞう紙に書かれた問題を学級一人一人がとりくみ、出題した教科班は、各人の解答用紙を回収する。

③. 教科班は、各人の解答すると同時に、短学活に使用したもぞう紙と模範解答を教室に掲示する。

現在掲示物は上記のように短学活に、使用した課題が中心となっている。

今まで教師がプリントを配布していた時より生徒はよろこびをもって短学活にとりくんではいけるものの、生徒の手では各教科のポイントを十分課題形式の掲示物にしきっていない弱点がある。今後、各班の一人一人を生かすためにも、掲示物のあり方を、もっともっと研究していきたいと思っている。

第11回 全国バス学習研究集会

ひとり、ひとりの人間形成と
学級づくりの取り組み

寝屋川市立第四中学校

はじめに

本校は奈良県と大阪府にひ
ろがる生駒山を南にあおぎ
山と緑にかこまれた自然の
色濃い北河内丘陵である。
しかし社会環境として同知
地区をかかえていることに
よって数々の問題点を持っ
ているのが現実である。

生徒の姿態

①自分から進んでやろうとす
る自主性や積極性に乏しい。

②自分自身に対する厳しさに
欠けるが他を批判すること
や規律面に欠ける。

③生徒相互の協力、話し合い
が少い。

④努力に欠ける。

取り組みの主題とその経過

〈主題〉

何も言わない生徒、言いた
いけど言えない生徒、いじ
けた生徒、そんな生徒達の
心の中に少しでも認めても
らいたい、成長したいとい
う気配を感じて班づくりを
始めた。

この班活動を通して、一人
一人の能力、個性、才能を
認めあい、伸ばしていく方
向で取り組んでいる

〈経過〉

①一人、一人の人間形成を
求めるには集団(班)の質
が高められることが必要
だということを生徒に理
解させる

②努力の成果を認める場
何でも自由に相談できる
場、それが班であるとい
うことを指導

③思っていること、感じた
こと、何でも書ける班ノ
ートを作り書くこと、考
えることの大切さを理解
させる。

④話し合いを通してノ
ートを通して協力というこ
との大切さが少しずつ理
解できてきた。

振り返りの内容

(1) 班編成の方法

① 班の様子、内容によつて2~1ヶ月で班がえ

② 構成人員

男子3名 女子2名

③ 生徒の実行できる範囲で班目標の設定

(2) 班長の選出

各班で班長を選出

今まで係などになった経験のない生徒がはじめて班長に選ばれ、仲間をまとめるおっかしさを自覚してきた

(3) 班活動

<教科学習>

・ 短答活字の問題作成

各班で得意な教科を決めてテスト準備、復習を中心に進めてきた

<学級活動>

・ 給食当番

・ 清掃

(4) 班ノートのねらい

・ 書く力を身につける。

・ 書くことによって自分の考えをまとめていく力を養う

・ 自分のこと、仲間のこと、生活のこと何でも自由に書くことにより、集団の中に

自分を出すことができる。

・ 班ノートが生徒相互はもとより教師と生徒のより深いつながりと理解を深めるという視点に立って学級運営に生かしていく。

実践を通して

<H君の班ノート>

前の班はあまりおもしろくなかったけど今の班はとておもしろい。僕は中学を卒業してからバイクの免許をとりたい。そして中古車のバイクにのって旅をすること、これが僕の夢だ。

H君は学力も低く学習には逃避的な態度で友達もほとんどでできない状態であったが車の話を通して仲間ができてくるようになってきた

<O君の班ノート>

僕は今日の6時間目の話し合いの時とても腹がたつた

(1)

人の意見は聞かず友達としゃべっている。

(2)

あてられても何も言わないしかし勝手にしゃべっている

(3)

授業中、先生をバカにした言い方をしている者がいるとくにA君とB君は乱暴だもつと先生が叱ったらしいのに。

もし先生が言わないのなら僕がぶんなぐってやる。こんな気持ちになったのは始めてだ。めっけり班長がして

かりしなさいといけないな。

M君のノートの内容は班
組織をことごとく発展していった。
反省の言葉より仲間の発
言の方がより大きな力と
なったのである。

<M子の班ノート>

あの解放会館でやっている
一部の人の解放学習って一
体何ですか？私は一度言
いたかったので。
なぜ一部の人が学習を
するのであるか、なぜみんな
でやらないのですか。
自分達で一つの輪を作って
も結局に単に弧をした一
つの輪でしかないんじゃない
んですか。
地区なんて関係ないやない
の、仲間に入れて、そして
みんなて話をしよう。

同和地区をかかえた本校
で解放教育は大切な実践
目標の一つです。しかし
これまではみんなわかっ
ているけど何も言わな
かった。M子もだまっ
た。しかし班ノートを
書くという方法ではじめて
自分の考えを思いっきり
仲間に、学級にぶつけ
ていきはじめた。

<K君の班ノート>

今の心境。
今とって、とっていろいろ
んな人と会話をしたい心境
なので。たとえば苦勞を
してきた大人の人、他の言

校の子、サの子、そして反達
など……とん。
いろいろなことを語りあって自
分をみつめなおしたいのです。

K君はいつもニコニコして
いる明るい生徒です。しか
しこのK君がだんだんと天
人への道を歩みだしてきた
ことがこのノートを通して
ハッキリつかめるようになった。
自我のめざめを仲間
のノートを通して多くの生
徒が自覚してきた。

取り組みの結果と今後の課題

できるだけ生徒とはともに食
べ、遊び、語り合う機会を多
くもちたいという思いで、主に
班ノートを通して学級経営を
進めてきた。
はじめはほとんどの生徒が何
も書かず、興味すら持たな
かったが型式を定めず何でも書
きたいことを書かせることか
ら出発し、どんなささいなこ
とにも返事を書いていくよう
に努力していった。
班ノートの取り組みの中で特
にH君とY君の成長には大き
なものがあった。
この二人は学力も低く高校進
学など絶望的な状態の中で乱
暴な行動が多かった。それ
まで他の生徒はじつと二人を
みているだけであつたがノー
トを通して二人の気持を理
解し、しだいに班の問題とし
て学級の問題として意識しは
じめてきた。その結果みんな
ささえの中で二人は進路に目

的を持ちはじめた。
しかしこの取り組みの中で入
試という現実問題が班を少し
ずつかえようとしている

ノートをかきより勉強。

人の心配より自分のことを
心配しなければ……。
現在の体制の中で入試という
大きな壁にぶちあたり思っ
ていっても何も書かない、言
わない生徒がはじめて来たの
である。やつと自己をみつめ
る力がでて来たが入試がそれ
を破壊しようとしている。
この大きな壁を前に一人の教
師の力では何もできないこと
が感じられた。
今後の課題として現実問題を
冷静に見つめ教師間の話し合
いを通してこの問題に対する
共通理解を深め、その上に立
った一致した指導が必要であ
ろう。
またもう一つの課題としてほ
%の同和地区生徒をかかえる
本校として差別に立ちむかう
人間を育てるために教々の問
題点を解決するより一層の努
力が必要である。

楽しくうるおいのある 学級づくり

—— 自分たちの力で教室をかえていこう ——

愛知県豊川市立干両小学校

佐々木 忠 允

はじめに

児童数184名、教員数8名、自然が残りの土においのある小規模校。この特性を十分生かし、子どもと教師がおたがいに生かすふれ合いを通して作用しあい、楽しくうるおいのある学級をつくるために、広い観点から活動を掘りおこしてきた。

これは、全校体制の中で取りくんできた第6学年のささやかな実践の報告である。

1. 楽しさは つくられるもの

楽しさの内容を個々の児童からみてみると、さまざまな要因があげられる。だが、いずれの要因をとっても、それは初めから子どもの中に、教室の中にあるのではなく、教師と子どもとが共に作り出していくものである。

ここで作り出される楽しさは、未しょう的くすぐりの楽しさではない。もちろん、子どもに迎合した楽しさでもない。生活の充実と張りの中から生まれてくる楽しさをさしている。

2 楽しさは価値追求のよろこびの中から

楽しさとは、子どもたちが生活の中に自らの目標と問題を見出し、それにむかって追究活動を進める中で生まれてくる自己実現の喜びであり、自ら生活をつくり出していく喜びである。その過程は「きょうよりもあす、あすよりもあさって」と自らを変容させていく過程であり、教室を変容させていく過程である。

3 生活の核となる五つの活動

「朝の活動」、「ひとり活動」、「仲間活動」、「土曜日の活動」、「児童会活動」・・・これら5つの活動場面は、「楽しくうるおいのある学級づくり」という観点からみて、最も谷間になっている生活場面は何か。逆に、干両の特性を生かし、最も教育効果があるだろうと想定される場面は何かという観点から子どもたちの生活を再点検してえらび出したものである。

この5つの活動を核にし、教科と教科外の統合の理論に立ち、「自分たちの力で教室を変えていこう」という生の声を求めて、具体的な実践活動にはいつていった。もちろん、それは、全校体制の中での実践であった。

4. 五つの活動の組織化と運営

五つの活動は有機的に結びついて子どもの一日の生活をかたちづくっていきなくてはならない。その運営は時間的ゆとりと弾力性を持っていきなくてはならない。

朝の活動		終わりの活動	
8.25	8.35	8.57~9.00	3.00 3.25 4.30
月	テ	学校行事としての朝礼	自己相互評価活動
火	マ	学級独自の活動	仲間活動
水	マ	児童集会	自己相互評価活動
木	ソ	学級独自の活動	ひとり活動
金	ソ	学級独自の活動	自己相互評価活動
土	グ	文化的・身体的創造活動	自己相互評価活動
(隔週 児童が計画する土曜日の活動)			

- ・チャイムの一部廃止
- ・40分授業の設営と20分間放課
- ・朝の活動と終わりの活動を15分から25分へ
- ・「仲間活動」と「ひとり活動」のある火・木曜日は、午後3時10分で時間帯をとりはらい、自由に使える時間へ。
- ・隔週の土曜日は子どもが主体的に使える時間へ。

学校における子どもたちの一日の生活帯をながめてみると、子ども自身で自由になる時間が実に少なく、わくにはめられた生活をしていることに気づいた。このことが子どもたちの行動を意欲に乏しい無気力なものにしている要因になっていた。子どもたちの自主性を伸ばし、のどましい責任感を育てるためには、子どもたちが自分たちで処理し、運営できるような時間帯を確保し、保障してやらなくてはならない。こう考えたのが上記のような結果を生んだ。

5 朝の活動は子どもとの初めての出会いの場

朝の活動は25分間という短いものであるが、子どもとの初めての出会いの場である。ここでいかなる質の活動がなされるかによって、その日の学級生活が大きく左右される。

わたしはこの時間を一日の中で最も重要な時間としてとらえた。すなわち一日の活動のエネルギーをわきたたせ

るような人間的なふれ合いの時間、子どもたちの人間形成にかかわるような質の高いコミュニケーションや協同活動の時間、そして、児童理解の時間に積極的に作り変えていこうとした。

(1) 生のふれあいを求めて

この朝の活動の時間につちがかわれる人間的なふれあいや信頼感、一体感はその日の活動へのエネルギーとなり、楽しさ、豊かさへのがきとなる。

- ① このひとことが子どもの心に・・・
 「朝のひとこと」「先生とあく手」
 ・よっちゃん、きょうは調子いい？
 ・そうか、失敗を気にするな
 ・先生もきょうは張り切っているぞ
 握手をしながらかわすひとことが
 子どもの心をやわらげ、ときほくして
 いく。

- ② 子どもは先生の生の姿を知りたい。
 教師然としていて子どもとのふれ
 合いは生まれぬ。

- ・「先生のできごと」…3分間（発
 表の黒板に日記風に作文
- ・先生も、そんなことに困ったり悩
 んだり、喜んだりしているのか。

- ③ みんなで喜び、悲しみ、みんなて
 考える・・・「生活をみつめて」

- ・母親にしかられた悲しさ、チャン
 ネル争いにまけたくやしさ、ソロ
 ボンに合格したうれしさ、勉強の
 わからぬつらさ — 毎朝、みんな
 とともにわかち合い、考え合う中
 で生まれてくる連帯感

- ② 児童自身に残る生活体験の発掘を
 子どもたちの人間形成は、仲間との
 コミュニケーションや協同行為をぬき
 にしては考えられない。とかく、何と
 なくすすることが多い子どもたちの生
 活の中で、この朝の活動を利用して、
 意図的な協同活動やコミュニケーション
 活動させることは、子ども的人格形
 成に必ずよい結果を生む。

- ① 協調性を意識させながら、自分た
 ちの力でつくりあげていく活動
- ・グループ文集づくり、新聞づくり
 - ・童話、お話づくり

- ・共同作品

- ④ 子どもの生活に根ざした話し合
 い聞きあい活動

- ・生活をみつめて
- ・このごろ思うこと
- ・研究発表
- ・歌声活動

- ⑤ 集団づくりを基礎にしたゲーム
 遊び、体力づくりに関した活動

- ・学級の体操づくり
- ・ゲームづくり

- ⑥ 行事に関する内容の活動

- ⑦ 子どもらしい創造的で豊かな心
 情をつちかたっていく内容の活動

- ・ふるさとの民話、伝説
- ・歌の創作活動 十分間童話
- ・共同版画

- ⑧ 生活の流れの反映を
 (省略)

25分間に以上述べてきたようなぬ
 らいの活動をおりこんでいくには、内
 容の吟味と周到な計画が必要であった。
 子どもの発想をベースにしながら、月
 々、評価と反省を加え実践していった。

- ⑨ 終わりの活動は生活の流れの反映
 と方向づけ

教室の中に生活改造のサイクルを・・・
 個人にも集団にも目標は必要である
 目標があって活動のエネルギーがわき
 その達成は大きなよろこびを生むもの
 である。学級には、その目標を確認し、
 反省、実践、評価していくためのサイ
 クルがなくてはならない。

わたしは、月・水・金の終わりの活

動を生活改造のサイクルの重要な拠点にしようとした。

① 自己評価のとりいれを — 「生活の道しるべ」

目標や行動基準を明白にすることは態度変容の目的にもなるし、変容を促進させることにもなる。毎日、自分の生活を点検、評価していくことはそのまま自己の変容にもつながる。この自己評価活動を「生活の道しるべ」とよんで、月・木・金の終わりの活動にとり入れていった。

② 相互評価のとりいれ

この過程は子どもひとりひとりの心のすみにある問題が全体との問題とのかかわりの中でクローズアップされる過程であり、個人と集団の目標が決まり、「あすの生活」へのエネルギーが蓄積されていく過程でもある。

7. 自らの目標・問題に自らのペースでとりくむ「ひとり活動」

木曜日(15:15 ~)

現在、子どもたちを見た時、学校生活の中で、自分の个性的問題や目標を意識し、それに挑戦していく機会と場と時間がとれだけ与えられているか。また、はたしてそれをなし遂げる喜びをどのくらい味わっているのだろうか。

せめて週一度ぐらいはゆくをとりはずし、自分の時間を確保し、自分の計画と方法ですてさせることは、自己実現のためにも望ましいことではないだろうか。また、

わたしたちはひとつの問題・目標を持ち、それに挑戦し解決した時こそ、最も強い喜びと満足感を得ることができると。

木曜日のひとり活動はこうした考えにたって全校体制の中で生まれたものである。この日は3時15分で正規の授業は終了する。このあとの時間は完全に個人のものである。

子どもたちは3時15分になると前もって計画した(記録用紙利用)ひとり活動にとりくむために、それぞれの場にちって行く。それは図書館である場合も、運動場である場合も、自分の家である場合もある。それぞれの活動テーマによって最適の場所を選ぶのである。

① 自分の生活に根ざす切実な問題をとりあげて

切実というのは、子どもたちがもっとも知りたいことであり、もっとも興味を持っていることであり、もっとも困ったり、疑問に思ったり、矛盾を感じたりしたことがらである。

① 学校での学習に直接結びつくもの
・予習・復習 ドリル 疑問点、くい足りなかったところ

② 学校での学習が引き金となって生まれきたもの
・自主的研究 ・もっと知りたい
・疑問、矛盾の追究

③ 学校の学習と関係なく、自分の興味、関心、趣味から生まれきたもの
・継続的研究 ・造形的活動
・手芸的活動 ・体カブくり

④ 労働に関する内容

子どもたちが無意識に毎日の生活を送るのでなく、「今、自分がとりくまなければならぬことは何か」という目的意識を持って自分の生活をきりひろいでいくためにも、子どもに現在の生活に根ざした問題を見つける力と態度をつけることに心がけた。

(2) 「ひとり活動の記録」をもとにした個別指導を

この活動が個性的であるだけに細かな個別指導が必要となってくる。活動は全て「ひとり活動の記録」というシートに書きとどめられているのでこれをもとにして指導をした。

「やること」と「なぜ、それをやるうとした」といったテーマを意識していく過程、計画づくりの過程、実践をささえる強い意志力……こうしたことを特に指導のポイントにおいてきた。

今後さらに継続し、自分自身の生活を改造していく力にまで発展し、定着させたいと願っている。

8 みんなで見つけた問題に、みんなととりくむ「仲間活動」

火曜日(15:15~16:30)

仲間との協同活動やコミュニケーションを通して子どもは成長していく。

子どもたちの生活帯をながめると、子どもたち自身で自由になる時間が実に少ない。まして、仲間とひとつの活動に思いきりとりくむといった時間的ゆとりは少なくなってきた。

こうした時、たっぷり時間を保障してやり、質の高い意図的な集団活動に取り組ませることは、子どもの生活に活気と意欲を与え、自主性を高めることにもなる。同時にそれは楽しい学級づくりにも結びついていく。

(1) たっぷり時間を保障して

火曜日は3時15分までゆとりはらわれる。4時30分まで担任は学級の子と仲間活動に参加する。

1時間15分ではあるが、毎週、決まった日にこれだけの時間が保障されたことは、時間的長短ではあらわせないゆとりを子どもの生活に与えることになった。

(2) みんなでみんなの活動をさがして

子どもたちに自由になる時間を保障してやることは、その活動内容も保障してやるということである。

ひとりひとりの要求が話し合い活動を通して集約され集団の要求、目標としてまとまっていく過程については適切な助言をおこたらなかつたが、決定された活動についてはどんな質のものも認め、子どもたちが、仲間とやることのたのしさを味わえるように援助してきた。

① 学級旗、学級歌をつくる

② イチゴ畑をつくる

③ 文集「あすなろ」づくり

④ 思いきり遊ぼう

⑤ 古境を見学にいこう

⑥ ノートづくりの発表会をしよう

子どもらしい素ほくさの中に、生活に根ざしたふわりつきのない活動がたんだん見られるようになってきた。

9. 子どもたち自身の手で生活が営まれる「土曜日の活動」 — 隔週

この日は教師は一步後退し、子どもたちの活動が大きく前面に出てくる。だからといって子どもにとっても先生にとっても息ぬきの時間では決してない。実際には非常に質の高い行動が要求される。その日のテーマ決定、その根拠、活動の方法、時間配分など、十週間前、1か月前、長い時には2か月前から子どもと先生とが一体となった準備が必要となってくる。

生活の中から当面する目標、問題をみつけ出し、自分の生活を切り開いていける子にするためにも、企画から実践まで子どもたちの協同行為の中でやらせてみる必要があったが、もちろん、教師の指導性ぬきにしてはこの活動はありえなかつた。

まず、はじめに教材外活動、特に児童会活動を土曜日に集中することからはじめた。

(昨年度の実践の一部)

月	日	1時間目	2時間目	3時間目	備 考
5	10	青 空 運 動 会			児童会、集会委員
	24			舌栗のつどい	手づくりのけしきり持参で山のぼり
	31	4・5月誕生会			
6	14		ひとり活動発表会		3～6年生まで
	28		修学旅行あげ話の会	クラスの歌発表会	
12	20	も ち つ き 大 会			
1	16		た こ あ げ 大 会		冬休み中の手づくり
	30	他 校 と の 交 歓 会			
2	13			児童会おりの準備を	前夜祭・当日
	27	児 童 会 ま つ り			おみこし研究発表 歌声ゲーム・スホッ

空白の部分には学級独自の計画で実施。 — 6年の実践例

- ①修学旅行記100枚にとりくもう ②古墳の見学にいこう
- ③ジャガイモをほってサラダをつくらう ④学習方法を紹介しよう
- ⑤マルテシートのがき方を研究しよう ⑥あゆみを残そう ⑦...

この活動の実践は浅い。「実践の中での模索」この気持ちを忘れずに、「土曜日の活動」のあり方を考えていきたい。

10. 力の集中過程を大切にしたい児童会活動 (略)

— 動いている児童会 —

お わ り に

楽しさは教師と子どもとが共に作り出していくものである。「干渉の子どもを見失わない」ように自らを戒めながら、今後も活動をすすめていきたい。

授業のシステム化をめざして

—— 教育工学とバズ学習 ——

兵庫県姫路市立琴陵中学校
原 田

守

I まえがき

“ひとりひとりの生徒にわかる授業” “すべての生徒が嬉々として参加活動できる授業” これはすべての教師の願いである。

特に最近学校教育によせられる多くの批判と大きな期待、教師のなすべきことは多岐にわたり、多忙をきわめ、ともすればその目標すら見失いがちになる。授業においても種々の学習方式や授業形態が数多く研究され、主張され、時には1時的な流行の如く忘れ去られようとするものさえある。ここで我々は授業を通して生徒をどのように変革しようとするのか、その目標を明確にしていなければ、特定の主張や方式に心をよせるとそれだけが巨大にみえ、他の方式は矮小にみえてそれに固執し、それがさも万能であるかのような錯覚に陥る。こうしたある方式だけに偏る情熱過剰は大きな危険性を含むことすらある。

授業の目指すところは、義務教育課程としての基礎的な学力をすべての生徒に保障することは勿論であるが、同時に未来社会の形成者として、心身ともに健全な人間の育成も前者に匹敵する目標でなければならない(異説を唱える人もあるが自分はこう信じている)

しかもこの2つの事柄は、個々別々にあるのではなく、1つの授業の中に融合するように意識して計画され実践されなくてはならな

い。教育機器は個別学習を主張し、バズ学習は人間関係を重視すると端的に解する人もあるが、この両者の目指すところは全く同じであることは、その論者の著述で明白である。

授業の改造には特定の方式を多少前に打ち出し乍らも、諸方式の相補関係を洞察して、それらを有機的力動的な組合せに努めることが重要であり、これも1つのシステム化と見ることができよう。

II 授業のシステム化

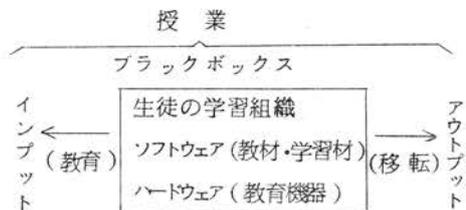
本校が学校をあげてバズ学習にとりくんでから5年半(昭46.4)、教育機器の研究をはじめから3年半(昭48.4)の歳月が、流れ、「授業のシステム化をめざした学習過程の研究」をテーマに、1昨年中間発表、昨年11月本発表をする機会を得た、本校全教師をあげての取組みを進めながら、現在到達したシステム化に対する考え方を、私見をまじえて述べてみたい。

授業に機器を導入するのが教育工学でもなければ、教案をフローチャート型式で書くのがシステム化でもない。またシステム化することが目的でもない。学習指導の近代化は個別学習の徹底だという人もある。個人学習だけが授業の目的であるとするならば学校の存在理由は非常にうすくなる。教材は氾濫する情報化社会の至るところに数限りなくあるし

指導者が必要ならば、テレビ、シンクロボックス、家庭教師、塾等の開発利用で事足りる、生徒を学校にあつめ、教室に集めるにはそれだけの意味があるわけで、それは現代教育がより人間教育を重視し、よりよき人間関係を育成しようとするからである。この現代における教育観が、組織人としての理想的な人間像をとらえている面は否定できない。このように考えてきたとき、これからの授業形態は、一教師が一冊のテキストをもってチョークで板書しながら解説を進めるという、旧態依然とした単純な授業を展開していたのでは充分とはいえない。

教育（授業）の現代化を考えると、内容と方法の両面が考えられる。内容については現代化の方向に大分定着してきたが、一方教育機器が開発普及する中で方法だけがひとり止まっていてよいはずがない。

授業には各種の学習内容があり、各種の指導方法がある。しかもその時間の目標行動を達成するために、いかに効率的な最も適格な条件を計画し実現するか、いかにして小さい入力（教授）をもって最大の出力（転移）を得るか、どのように機器やソフトウェアを組み合せ、どのように一斉学習、小集団学習、個別学習を位置づけるか、という問題を解決しなければ最適化された授業の展開を見ることは不可能である。

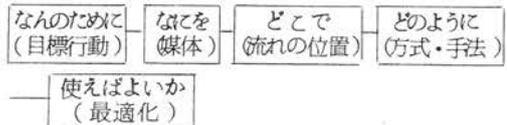


ここで考えなければならないことは、授業システムのサブシステム（上図ブラックボッ

クスの中の項目）をどのように全体的有機的な関係をもって組織づけてゆけばよいかということである。授業システムの考察でシステムの必然性は学習の効率を高めることにあるから、授業のシステムは、教材の伝達、学習の成立定着を進める場合、いかなるサブシステムの組合せによって、より効率的な結果をあげるかという目的を達成するために計画されなければならない。端的にいえば、授業のシステム化とは、最近よくいわれる授業の最適化を図るための、1つのしかも効果的な手法といえよう。

このように学習の科学を基礎として、ハードウェアやソフトウェアの開発を進めながら、それを具体的に授業において組織し展開して効率的に実現していくプロセスを精密に計画し実践するというに授業のシステム化があり、それを研究実践しつつ、チェックし、フィードバックによって修正を加え、更に最適の方向を見つけた実践学が、狭義にいう教育工学と解することができる。

学習内容も数多くあり、その精選構造化も必要である。学習の方式（講義式・1問1答式・プログラム方式・シート学習等）、学習指導の型（誘導型・発見型・誘導発見型）、指導形態（一斉、小集団、個別、グループ等）、更に生徒の条件や教育媒体等種々のものがある。これら授業を構成するあらゆる要素をすべて洗い出し、目標行動に到達する体系をより効率的に組立てるのが授業のシステム化の第1歩であり、すべてに万能な機器も方式も存在しない。要はそれぞれの特性をよく知った上で



を組織することがシステム化のめざすところであり、システム的手法を授業の実践に応用しようとするのが教育工学の一分野である。

もう1つ最適化の条件として忘れてはならないことは、生徒が「喜んで楽しくやる」ということである。授業は勿論個の成長、集団の向上を狙って学習効果をあげることが中心課題であるが、生徒が楽しく参加活動しなければその効果も期待し得ないであろう。

Ⅲ 実践のあゆみ（教科指導関係分の概略）

昭和45年……○教科指導研究発表会

（教材の精選構造化）

昭和46年……○小集団学習にとりくむ

（学習集団づくりの研究）

昭和47年……○バズ学習の理論研究

（生活バズ・教科バズ）

昭和48年……○第7校時特設教科バズ実施

（低学力生徒の学力伸長）

○機器導入の理論研究と実践

（学習の効率化をめざして）

昭和49年……○バズ学習の研究実践

（教科バズと特設バズ）

○学習指導過程研究中間発表

（授業のシステム化）

昭和50年……○バズ学習継続研究実践

（反省・検討・改善）

○教育工学実践研究本発表

（教育機器と小集団学習を

有効に位置づけた授業の

システム化をめざして）

Ⅳ 本年度のとりくみ（教科指導の部）

1 研究努力目標

「教育機器を有効に位置づけた授業の効率化を図ると共に、小集団学習による学習の個別化の徹底を期する学習指導過程はいかにあるべきか」、即ち、全員の学習参加と授業の最

適化をめざして、小集団学習による低学力生徒の学力伸長と人間関係の向上、特性を生かした機器の活用による授業の効率化の2つを授業の中にどのように位置づけ、最適な授業にするかが、本年度の研究実践目標である。

この課題については、昨年までも授業のシステム化をめざした研究を進めてきたが、本年は更にこの上に立って、これを日常の授業に活用定着させ深めてゆくか、研究の成果をどれだけ生徒に還元し得るかが、本年学校の目ざすところである。

2 とりくみの姿勢

① 議論より、まず実践

② 教える授業でなく活動する授業

憶える授業でなく思考創造する授業

③ 教材の精選による基礎学力の徹底

④ 校内研修と相互参観による研修充実

上記を4月当初の職員会で申し合せ、とりくんできた、特に①については、いくら理想論が研究され発表されても、毎日の教育活動の中で永続的に実践可能なものでなければ空論に過ぎない。理論的根拠のない実践にも問題はあつたが、実践なき理論は更に問題が大きくなり、旺盛にして否定的主張が優先することが多い。理論と実践は並行して進むべきだが、むしろ日々の授業研究は、実践が先行すべきである。実践することによって問題点を身をもって体験し、理論を研究して修正改善し、更に実践によって実証して行く。実践なき授業改善論はまさに形骸化されたものといえよう。

見せるための1時間の授業が如何に立派であつても、それが日々の授業に継続実践が不可能なものであつては全く意味がなく、単なるお祭りさわぎにしか過ぎない。いやかえって生徒に犠牲を強いている時すらしばしば見受ける。機器導入にしてもその特性を知って

活用せよといわれる。一見一理ある言葉である。しかし実際に使ってみることによって特性が把握されるし、時には予想外の効果を発見し得ることもある。

「議論をする前に先ずやって見よう、使ってみよう」、これを合言葉に本校全教師はこの課題と取り組んでいる。

3 研究内容

(小集団学習)

- ①学年当初における小集団づくりをどうするか。
- ②生徒の発達段階に即した各学年におけるバズ学習は如何にあるべきか。
- ③教科指導の中における小集団学習の位置づけととりあつかい。
- ④教科の特性に応じたバズ学習の研究
- ⑤集団評価のすゝめ方の研究
(教育機器)
- ⑥すべての教師が自信をもって利用できる理論研究と操作技術
- ⑦学習指導における機器利用の有効な位置づけを分析する。
- ⑧TP、VTR教材を継続作成し、集中保管、活用する。
- ⑨特性を生かした機器の複合利用の研究
- ⑩指導過程の最適化へのアプローチとして評価(チェック)、フィードバック、KRをどう効果的にするか。
- ⑪授業分析と修正指導案の作成
- ⑫評価(テスト)の工学的手法の研究

4 研究方法

- ①各月最低1回以上「校内研修日」を設けて全職員がこれに参加する。
- ②研修は「全体研修」と「教科別研修」に分け、原則として隔月に実施、その他に「個人研修」を設ける。

③「全体研修」では、教育機器関係と小集団学習関係の内容で、理論研究や実践報告を実施する。

④「教科別研修」では各教科1名以上が研究授業を実施し、各教科担任毎のグループで指導法の研究討議をする。

⑤研究授業は教育機器と小集団学習をとり入れ、授業の効率化と個別化をねらった、システム化に留意した内容のものであること。

⑥研究授業は事前に教案(フローチャート形式)を全職員に配布し、同一教科の教師は必ず参観、他は自由参観とする。

⑦研究授業は原則として、第7校時特設バズの時間をあてる。

⑧以上の研修計画の立案運営は研究推進委員会(構成人員9名、毎月2回開催)が中心となってこれを行う)

研究の組織、年間計画、年間研究授業計画も作成実施しているが紙面の都合で略す。

V 授業の流れの中におけるバズ学習の位置

1 レディネスとバズ

全員が本時の目標行動を達成するための学習活動をするには、その最小必要限の前提条件が必須となる。それは時には前時学習の要点であったり、時にはずっと以前に学習した事柄かも知れない。又日常経験から体験したことかも知れないが、どの場合にしろ教師は旺々にして、過去に習ったことだからわかっているはずだ、常識だから知っているはずだと1人合点で決めてかゝり、授業に入ることが多いが、生徒の実態を把握しないで効果的な授業が成立するはずがない、かといって、レディネスに長時間をかけていれば本時の学習活動の時間が削減される。短時間で科学的効率的に実施するには対人バズが最もよい。対人バズでチェックして、不十分な生徒には

班で話し合っ確認させると短時間で効果的に実施できる。

2 チェックとバズ

目標行動に到達するための授業中におけるメインチェック、サブチェックの重要性については多言を要しない。

チェックはどんな方法（観察・テスト・発表・問答等）によるにしても、下記の3つの条件をそなえていなければ、その意義や効果はうすくなる。

- ①即時評価であること。
- ②1部の者より全員が望ましい。
- ③科学的（教師のカンや漠然としたものでない）にキャッチできること。

方法としては種々あるが、1部の者に答えさせたり、特に教師がよく使う全員の者に対して「わかったか」という言葉、傍で聞いていると確かめるよりも「わかった」という返事を強制している感じすら与える。

- ①生徒の挙手——最も簡単で多く見受けられるが、その時の雰囲気によって欺満が多く科学的でない。挙手のあと、その者に指名発表させることもあるが一部の者の発表では、その者の実態しかつかめない。

（この問題は本校で詳しく実験研究した上で実証している）

- ②反応盤——上記欠点を補うため本校で考案し、授業に活用していたが、やゝ幼稚な感じで、中学生では抵抗があって永続しない。

- ③反応分析装置——アナライザーかせめてミニライザーでもあれば問題は解決するが、財政面ですべての教室に設置することは困難である。

上記の理由でそれぞれ問題点がある。バズがすべての場合良いとはいわないが、比較的这些の問題をよく解決してくれると思う。

方法としては、対人法でチェックしてから挙手をさせ、全体をチェックしてもよいし、班の中の誰かが発問者になって班の者1人1人が答える質問法によるチェックも考えられる。こうすれば、科学的にキャッチされ、フィードバックのてだてもより明確になる。

3 フィードバックとバズ

本来チェックや評価は目標行動の到達度を知り、授業改善の資料のためにこそなされるべきで、ランクをつけたり選別だけを目的に行うべきものではない。おちこぼれの生徒が数多くできるのは種々原因もあるだろうが、過去において1時間1時間の授業の中で科学的にチェックされ、十分なフィードバックの手だてが講じられなかったことが累積していることに起因するものが非常に多いと思う。

チェックして、NOの者に対するフィードバックは毎時間の授業で、口でいう程容易なものではなく、本校の研究授業の指導案や実施授業の反省会でも、つねに問題になるのが、このフィードバックである。

- ①YesとNoの流れの時間差

複線型のフローチャートも毎時間の授業で考えて準備することも無理があるし、通過した者が足踏をして時間を無意味に過すことは効率的とはいえない。

- ②指導内容と時間制限の問題

- ③Noの者も個々に理解の程度やつまづきの箇所が異なる。教師は1人でNoの者1人1人にかかわることはできない。

- ④特に低学力で、レディネスさえ通過し得ない生徒に対する問題、時間はくるし、見切り発車は極力これを避けねばならない。

これらの問題を比較的よりよく解決してくれるのは、グループによるバズ学習である。

- ①の問題はバズ学習で解決する、わかってい

る者、できた者も自分の正誤を確かめることもできるし、教えることによって更に深く定着させることが可能である。唯漠然とわかっていたのではとうてい人に教えることはできない。

②の問題は時間的な犠牲は多少止むを得ないし、当然それを予測して指導案が作成されているはずであるが、どうしても無理であれば第7校時班の責任において解決しておくよう指示を与えている、本校第7校時の教科バスは低学力の生徒の学力を友人の力、班の力で伸ばすことを目的に特設してあるので、その趣旨にも沿うし、指示することによってその班は第7校時のとりくみがより明確になり充実する。本校ではよくこの方法を科用し、7校時はできるだけ指示を与えた班に出向いてアドバイスするよう努めている。

③は一斉に補説するより、個々のケースによってバスでやる方が効果的

④については、やはり第7校時のバス学習の時間を活用するより方法がない。前にさかのぼり基礎から教えるよう、その内容を指示しておく。

4 思考過程におけるバス

すべての思考過程でバスが万能とはいわないが、問題発見や解決の思考過程、要約やまとめの思考過程において、自分の意見を主張するとともに、他の人の意見も聞いて1つのまとまったものとする集団思考の効果は改めて述べるまでもない(ただし個人思考を軽視しては駄目、個人思考があってこそ集団思考があり、その結果がまた個人に定着する)型としては自由会話法が最も多くとられるであろう。

5 ドリルの過程とバス

学習結果の個人への定着を図るとき、ドリルは時間の許す限り重視されるべきである。ド

リルの時におけるつまづきは個々によって異なるが、一寸教えてやればわかる事が多く、根本的なものはあまりない。

ベテラン教師といえども短時間に机間巡視によって40名余りの生徒にかかわり合うことは不可能である。教師は最低学力の生徒1～2名につききりできて、特に他から質問があればそこへ足を運ぶ程度でよい。

ドリル時は対人法、質問法、質疑応答の方法等、その目的に合った最適な方法を選ぶ必要がある。

VI あとがき

以上、本校の未熟な実践やとりくみの姿勢について述べましたが、まだまだ未解決な問題や困難点も山積してあり、実のところ暗中模索している現状で、比較的スムーズに運んでいる面もあれば、中には実践を尊ぶといいながら「このようにできればよいな」という期待的なことも書きました。この機会に諸先生方の忌憚のない御意見、御指導を賜り、遅々たる歩みながらも止まらずに更に研修を深めて、ひとりひとりの生徒の願いに応えられるよう精進したいと思います。

⑤ 授業実践例や、研究統計資料については当日発表します。

自発共同学習をめざして

==== 学習用紙づくりを通して ====

愛知県豊川市立代田中学校・数学部

1. 研究動機

数学科の総括目標に「事象を数理的にとらえ、論理的に考え、統合的、発展的に考察し、処理する能力と態度を育成する。」と示されている。

また、数多くの現代化に対応した内容が打ち出されている。これらを含めて、数学科の目標を達成するためには、数学教育の現代化を推進し「数学的な考え」を育成することが大切だと言われている。

この「数学的な考え」の中で特に重視されているのが、「全体の流れを考えこれを構成しようとするもの」があり、さらに細分すると、以下の3つに分類できる。

- ① 概念や法則を創って、それらを拡張する考え
- ② 論理を伸ばす考え
- ③ 数学の構造を造り上げようとする考え

現代のように、激動する社会に対応する能力を養成することが現代化の目的であるとするなら、教育の内容も教育技術面、教材・教具のあらゆる点で上記の「数学的な考え」を支え、質

通す理念がなくてはならない。

そこで、教材の構造化を推進することが、生徒の事象を数理的にとらえる能力を育成する基盤である。

また、数学の特質とも言える系統性は数学教育では必須の条件ではあるがこのことが、反面数学嫌いを増加させる一誘因であることは明白である。

考えられる他の誘因は、数学教育現代化が内包している『数学的な考え方』の指導法が明確に確立できていないことにもある。

つまり、数学的センス（感覚）を扱う難しさがある。

例を上げると、暗算指導、図形での直観などが生徒にとって、つかみにくいものである。と同時に、現代化として打ち出された内容が入ったために計算能力が著しく低下していることも否めない。この原因として考えられることは、指導技術の欠除よりも、数学教育の方向が「考え方」を重視する方向へ移ったための現象とも言える。

○ ここで考えなくてはならないのが、教育評価の問題である。現在の評価尺度も計算力を測定することを重視した

ものが多い。数学の基礎学力としての計算能力も軽視できないので、豊川市内の5中学校で昨年「方程式解法」を構造的にとらえた内容で、合計1190名を対象にテストを実施し、その内容を検討および対策を研究している。

本校では1、2年生の内から数学を解決する能力差や努力差が大きい、特に分数計算、小数計算などの基礎学力とも言える内容が不足している。

そのため1時間毎の授業過程の中で能力差の大きい生徒を同時に指導し、基礎学力である計算力をつけるための練習時間を確保する必要から「学習用紙」を作成してきた。

2. 研究概要

本校の学校教育目標「共につくる喜び」を具体的に教科学習の中へ取り入れるために、「自発共同学習」を進める方途として「学習用紙」を考えてきた。

生徒が数学に取り組む時に、自発性を促し、学習の中味をつくる(創造)ことが事象を数理的にとらえていく前提条件であるし、基本的な態度ではないだろうか。学習を計画的(系統的)にすすめる、しかも小集団で取り組んで学習する課題として「用紙」を位置づけた。このような計画性の上に立脚してこそはじめて、数理的にとらえる態度も芽ばえてくるものと思う。

使用するにあたっては、4月始めに「学習の進め方」(本校の手びき)によって、生徒に使用法、趣旨、年間計画を解説した。単元が新しくなるごとに、オリエンテーションをもち、同

時にアンケート調査により、用紙の改善や個別指導の手がかりを得るようにしている。

(1) 学習用紙の学習形態

-
- 10分間 一斉学習
(教師中心と生徒の発表)
 - 30分間 小集団学習…考える時間の保障
(共同学習・個別学習)
 - 5分間 まとめ
(学習内容の確認をする)
-

(2) 小集団学習……30分の扱いを中心に

▷ この学習の中から本時の学習課題をとらえ、グループ内討議にかけ、焦点化して学習をすすめる、解決されなければ学級全体へ問題提起をして、大きな集団での学習へと移行する。

生徒自らが問題提起、発表して、解決する意欲を持って学習させている。

▷ (アンケートより)

- 式の計算のところでは初めわからなかったが、用紙があるので繰り返しでき、わかるようになった。
- 因数分解は簡単だと思っていたが、テストの前にもう一度やり直したら、思った以上にやさしかった。近頃は2年生のときと違って、教科書を見るのが楽しくてしかたがない。
- たまには先生から直接教えてほしい。

- 学習用紙でやるようになって、2年生のときとくらべて班の人にわからない所を聞けるのでよいと思う。

▷ マンネリ化

学習用紙で小集団学習を続けている間に学習パターンが定着してきたのは良い点であるが、学習に迫力が欠けてきたので、次の改善を試みた。

- (1) 小テストを入れる。
- (2) 自分のめあてを決める。
- (3) 自由な思考を生かすために応用カコーナーを設ける。
- (4) やり残したものは次の日までに提出させ、個人カルテに記録する。

▷ "Slow Learner" に
— 開かれた窓を —

3年生になってから、2年生のときの各種テストの平均点よりも、わずかずつではあるが、点数の伸びがみられる。それよりも彼等に対して、数学が開かれた窓を持つことの方がより意味が大きい。その中のひとりN子のごとばをそえると、N子が家にかこんで帰るなり、「お母さん、私、生れて初めて、自分の力だけで、数学の問題が解けたよ。」…母親の話では小学校入学以来9年間で初めてだそうで、この直後に開かれた参観授業に来てほしいと自分から言ったそうである。

3 学習パターン (学習内容別)

- (1) 理解型…発見的・随時的・理解的内容
- (2) 記憶型…概念用語の理解修得
- (3) 技能型…機械的技法などの習熟
- (4) 問題解決型…自己切実なプロジェクトの解決経験(実験など)

以上の4つのパターンが学習用紙にあるが、この内、理解型で行った実践例から取り上げてみると、

▷ 2年生の教材から

指導のねらい「概念や法則を創って、それらを拡張する考え」を育成する。

— 学習用紙No.92, 93 と評価テストNo.96 —

「四角形の面積を変えないで、三角形に変える。」

この目標を生かすために、学習用紙を改め、生徒の思考の独自性が生かせるくふうをした。

だが、用紙の記述がだまかすぎで学習課題を焦点化できなかったために期待したものは出てこなかった。そこで図2を全体学習の中で示すことで、生徒発想の転換と学習意欲の高揚をはかった。

○ 資料1 (No.92より)

図1 (例) 教科書より	<p style="text-align: right;">$AC \parallel DE$</p>
図2 全体学習	<p style="text-align: right;">$AC \parallel HE \parallel HG$ $BD \parallel HE \parallel GF$</p>
図3 個人学習(生徒)	<p style="text-align: right;">$AC \parallel BE \parallel DF$</p>

図3は授業の中で暗示した解答パターンの中の4つの中に含めていなかったの
で、生徒の反応の鋭さを示す好例だと思
うが、図1から、一歩踏みだしただけ
なので不満であった。

次に、No.93では次のように思考パ
ターン(類別化)を与えてみた。

。資料2 (No.93 参考資料6より)

図4 平行線の性質 (頂点を移す)

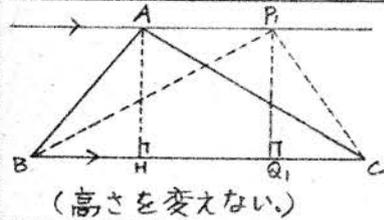


図5 平行四辺形の性質

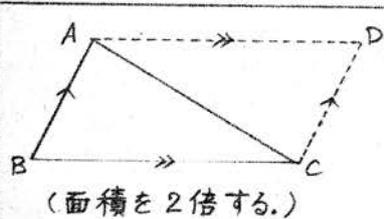
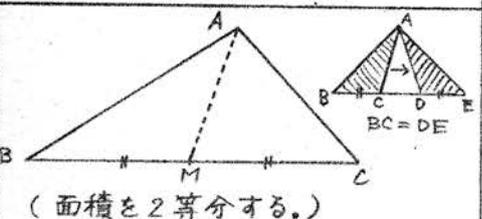


図6 三角形の中線の性質



。資料2の図4では、「頂点を移す」と
規定して、解答では、図1、図3で
あることを指摘した。図5では、
「もとの面積を2倍して半分にする」。
この考え方は三角形などの面積の
公式を導くときに用いている。

図6では、「底辺を移す」とし、こ
れは「頂点を移す」と対をなす考えで
ある。以上の提示から次に示す解
答がひき出された。

。資料3 (No.93, No.96より)

図7 底辺を移す (その1)

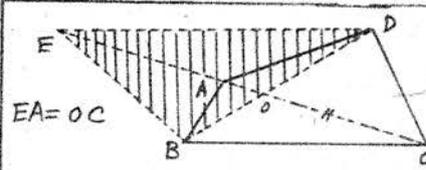


図8 底辺を移す (その2)

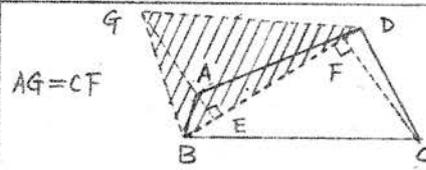
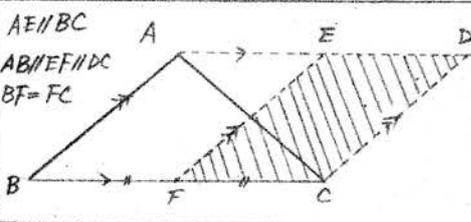


図9 評価テスト(△ABCを四角形に等積変換)

図2、(図5)が生かされている。



4 今後の課題

- (1) 理解度は小集団の濃度に大きく
左右されるが、一斉学習の時より
も効果が上っている。小集団内部
の学習に対する厳しさを育成する
こと。
- (2) 図形教材下の直観指導も類型化
することでシステム化をはかる。
- (3) 考え方の指導と評価システムと
の一貫性について研究をする。
- (4) Slow Learnerに対す
る診断と治療システムの開発
(文責 植田)

体育科におけるバス学習

豊田市立小清水小学校

I 基本的な考え

「児童ひとりひとりを伸ばす学習はいかにあるべきか」。ひとりひとりを伸ばすということは、ひとりひとりの可能性を探究し、その中に潜在する可能性や能力を信じ、さらに最大限に発揮させることである。このことは、個人の人間としての尊厳を重んずることになり、真理と平和を愛する人間を育成することになると思われる。

真にひとりひとりの人間を尊重し、創造的に自己実現をめざす児童を育てるためには、それぞれの特徴をもった児童が他人との「かかわり合い」の中で成長する人間形成の過程としてとらえた指導を押し進める必要があると考える。実際には、ひとりひとりの可能性を伸ばす学習の中で人間としての成長、発達を期待したい。

体育科では能力差、個人差があり、われわれはどちらかといえば能力の劣る者に重点を置きながら指導を進めることにし、体育の嫌いな児童をつくらぬことを第一に考えている。そのため能力別のグループ編成はできるだけ避け、これを集団内の対人的なかかわり合いの中で解決しようと考えてきた。

II 体育科のバス学習

(1) 体育科のバス

そのほとんどを動的な場面で占められている体育学習においては児童同志の相互作用を中心に人間関係の高まりを軸とした主体的な学習がなされ、話し合いも単に言語による表現にとどまらずお互いの心にふれ合うものがあるのはじめて高まりもし、深まりもする。したがってバスを言語による表現のみにこだわらず「心と心のふれ合い」「身体的接触による相互作用」も含めて考えたい。

体育科は身体活動を通しての学習が基本となっている。したがって絶えず身体活動を通しての思

考でなくてはならない。身体活動中におけるさまざまな心の動き「無言の話し合い」などの中心バスに対して「周辺バス」として位置づけ、この周辺バスを重視することにより、中心バスの内容を豊かにし、話し合いを活発化させるものとする。

① 中心バス

学習過程に位置づけられたバス、セットされたバスをいう。

ア 確認バス (学習の確認)

課題の確認を中心に、学習方法、約束など本時の中心となるバス。

イ まとめバス (学習のまとめ、次時への発展)

本時の反省とともに次時の学習の動機づけのバス。

② 周辺バス

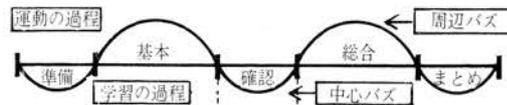
学習中随所に見られる話し合いを意味し、児童の自発的な話し合いなどのことで、位置づけは特にししない。

ア 無言バス (技の創造)

他人の演技を見て学ぶこと。これは言葉にこそできないが、無言のうちの話し合いととらえたい。

イ 補助、激励バス (学習方法の創造)

ある意味では一方通行的な面はあるがバスを目的としてとらえるならば、心のふれ合いの最も大きな場面と考える。



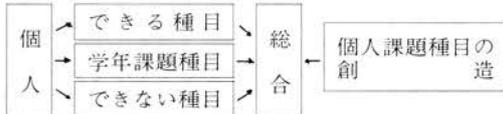
(2) 単元の構成と展開

児童個々の能力がじゅうぶん発揮でき、創造性が発揮できる豊かな学習を要求し、いろいろな運動が数多くマスターできる学習「発表会を目標とした組み合わせ学習」を考えた。

これは単元のまとめで行なう発表会を目標に、個々の児童が自分のできる種目を組み合わせる学習である。この一連の種目の中には自分のできない種目や学年の課題種目を加えて児童が自分の課題として設定するもので、児童にとってみれば、自分のできる種目の組み合わせから始め、自分の運動を創造し、自分の能力に合わせ、自分なりにまとめて発表するものである。

運動種目

- 自分の能力に応じて一連の組み合わせ運動をつくる。
- つなぎをくふうし、つなぎの種目をつくりだす。
- 新しい種目をつくりだす。



学習方法

- マットの並べ方、使い方をくふうする。
- マットと跳び箱の組み合わせをくふうする。
- 補助具の使い方、補助のし方をくふうする。

① 単元の課程

過程	内 容	児童の活動
準備	学習計画	1. 学習のあらましを知る 2. レディネス調査をする 3. 学習計画を立てる
中 心	基本練習 ● 学年課題種目 総合練習 ● 個人課題種目	4. 個々の課題とグループの課題を確認する 5. 学年の課題種目（できない種目）を加える 6. つなぎがスムーズにできるようにくふうする 7. 全体がスムーズにできるようにくふうする
確認	発表会 反省	8. 発表をする 9. 反省をする

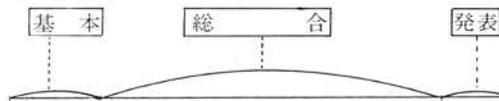
② 単位時間の過程

過 程	内 容	児童の活動		
準備	準備	ねらい方 準備運動	準備運動をする	
	基本	学年課題種目（できない種目） 問題発見	<ul style="list-style-type: none"> ● 試技をする友だちをよく見る ● 試技をする ● 問題点に気づく 	
中 心	確認	発表 診断 課題確認	意欲づけ	<ul style="list-style-type: none"> ● つまづきの原因発見（くらべる、話し合う、見当をつける） ● 重点をつかむ
	総合	個人課題種目（連続技）	可能性の開発	<ul style="list-style-type: none"> ● グループで助け合う、くふうし合う、励まし合う ● 技能をねる
確認	まとめ	代表グループの発表	相互評価	● グループ相互に発表しあう
		評価・反省 次時の課題確認	次時への発展	<ul style="list-style-type: none"> ● グループ、個人の反省 ● 生活化

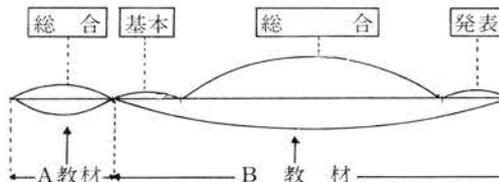
③ 単位時間の授業構造

1時間の学習は1教材あるいは2教材の組み合わせで行なう場合が多く、それぞれの授業構造を次のようにした。

ア 1教材



イ 2教材



(3) 低学年の学習過程

低学年の体育では、(準備)→(確認)→(総合)(まとめ)の過程とし、遊びを中心にいくつかの領域を組み合わせた総合単元の構成を考えた。

遊びは児童にとって、もともと生活であり運動である。低学年の体育では、教師が運動の技術面に気をとられ、単なる技術指導におわってはならない。また遊びでもおしつけがましいものであってはいけない。動きの多様化、動きづくりに中心を置くことにより、児童はたがいに友だちと力いっぱいぶつかり合える遊びの楽しさや、意義を感じるものである。そこからルールが生まれ、他人との協力の必要性、集団での遊びのよこびが生まれ、このように考えている。

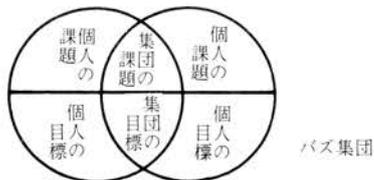
(4) 学習をささえるもの

① 課題

意欲が高まるためにはよく考えればよいというものではない。そこにはよい課題、適切な課題が与えられることが大切である。

課題には、教師から与えるものと児童自身が発見し、造り出していく課題とに分けることができる。しかし、そのいずれにも長所と短所がある。

そこでそのいずれにも片寄ることなく両者の長所を取り入れ、教師側から与えられた課題(学年課題)を児童が個々にそしゃくし、自分の能力に応じた単元の課題を造り出せるようにした。単元の初めに自分のレディネス調査をし、自分の技能を確認の上、5～6時間で目標達成可能な範囲で個々の課題を創造し構成する。



ここでいう個人の課題は、バス集団では共通の課題としてとらえなければならない。

② 発展的課題

児童は個人の課題とバス集団の課題をもって学習に参加している。この課題を追求し、目標達成するために今ひとつ発展的課題(本時と次時を強

かに結びつける課題)に目をむけたい。

ア 残存課題—本時の学習で残されたものはないか。

イ 復習課題—もつとたしかめておくべきことはないか。

ウ 発展的課題—発展的に学習しなければならないことはないか。

ここで生まれた課題は、児童の発見したものであり生きた課題である。学習をより高度なものへより質の高いものへと発展させるポイントであると同時に、体育の生活化の足がかりとなり得るものとする。これは、学習の自己評価であり、まとめのバズはこの点を中心に展開させ、次時の学習課題の確認と動機づけとした。

③ 学習訓練

児童に学習の仕方や、学習に対する正しい態度が身についていないとすれば、いかに学習内容が豊かであり、学習構造が合理的であってもその成果は半減するであろう。特に体育科において創造的、主体的な学習を展開していくとなれば、学習訓練が重要な位置をしめてくる。

学習訓練の原則

ア 現在のクラスの児童の実態や学習意識を診断して、どんな訓練が欠けているかを見とどけて年間計画を立てる。

イ 学習以前といえるような基本的な訓練や学習準備などは、最初から指導し訓練をくり返し、実施するようにする。

ウ 学習方法の訓練については、単位時間内にひとつずつ訓練項目をとりいれて順次積み重ねていくようにする。

エ 次々と新しい項目を訓練するのではなく、学習に役立つことに気づかせ、前時の徹底度を確認しながら次に進むようにする。

オ あせって体育の授業そのものが訓練に終始しないように気をつける。

以下、跳び箱運動とマット運動の組合わせによる個人課題方式の中学年でのバス学習の実践記録である。

(5) 指導例

学年 4年

種目 器械運動

ねらい

○台上前転とマット運動のつなぎをくふうし、スムーズにできるようにする。

○問題点を話し合い、補助しあって練習する。

課題

○台上前転とマット運動2種目をつなぎ、グループの運動を作ろう。

段階	教師の活動	児童の活動
確認	○グループで話し合いをさせる。	○グループの種目、順番、補助の有無について話し合う
総練習	○連続運動の練習をさせる ○役割り、順番を決めて練習させる。 ○つなぎをくふうさせる。	○グループの課題種目を練習する。 ○友だちの問題点について助言する。 ○役割り、順番を守って練習をする ○連続種目がスムーズにいくようにつなぎをくふうする。
合	○それぞれの能力に応じた補助を考えさせる。 ○友だちの試技をよく見させる。	○危険のない補助をする。 ○自分の試技と比べ参考にする

授業記録

① 基本(台上前転)

4年生では初歩的技能が追求されるわけだが、実際には前転も正しい姿勢で行なえない者もある。それに加え、台上での前転となると手をつく位置、ふみ切る強さ、台上ということでの恐怖などでできない者が多くなる。そこで、台を低くしたり補助のし方を指導して補助をつけた結果できない者が4人ほどになった。しかも、うまくできる者は、足を伸ばして台上前転ができるようになった。

この台上前転にマット運動2種目を組み合わせてグループの課題種目を作らせた。

(2) 子どもの作った課題種目

○台上前転 — 前転 — 前転

○台上前転 — 前転 — 後転

○台上前転 — 後転 — 後転

○台上前転 — 腕立て側転 — 前転

などである。

〈児童の声〉 (台上前転)

C₁: 勢いが弱いし、ふみ切りが弱いよ。

C₂: 手をつくところが前すぎるよ。

C₃: 背中を伸ばしたらだめだよ。

C₄: じょうずにできたよ。(以下略)

〈考察〉

指導のはじめに、台上前転で、技術的な面での注意する点を知らせておいたので、児童が友だちの試技を見て助言したり、自分の参考にするのに役立ったと思う。

〈児童の声〉 (台上前転 — 後転 — 後転)

C₁: 台上前転から後転になるとき、つなぎがうまくやれないね。

C₂: つなぎを考えようか、それとも台上前転の後の後転を前転に変えようか。

C₃: 後転を前転に変えた方がいいね。

〈考察〉

4年生でのマット運動は、前転、後転の2種目しかできていないので台上前転からのつなぎに問題のできたグループもあった。しかし、児童は連続技をスムーズに流すためにいろいろな「つなぎの種目」を考え出した。

児童の考えたつなぎの種目とその方法

①中腰のまま方向転換

②ジャンプして方向転換

③足を交叉して方向転換

④前転から同じところをもどって後転

⑤学習してない腕立て側転を使った方向転換

などである。

児童の発想を大切にし、運動の多様化をねらって授業を進めることにより、活発に学習ができるようになってきた。しかし、グループ、個人の課題種目を練習する時間をかなりとるため学年の課題種目を練習する時間が少なくなる。技術面のおさえをどの程度にするか、などの問題点がある。これらの点の解決が、われわれの大きな課題と考える。(昭、51、11、19)

第11回 全国バズ学習研究会

教科指導 (中学校)

テーマ “ひとりひとり生徒に課題意識を育て授業のよさ”
—— 指導過程におけるバズの位置づけ ——

静岡市立大里中学校

(1) 本校生徒の学習面に表れた欠点、問題点

全校職員との共通の欠点として、ひとりひとりにいかに
意欲的に学習しないこと、最大限の能力
としてあげられる。具体的表われと挙げて
みると次の通りである。

1. やりっぱなし、ゆがらなくともそのまゝにして
（板）
2. 家庭学習の習慣ができていない
3. 問題を発見できず、能力に欠ける
4. 発言が単発的で、ひらきつたり、継続に
いかな
5. 自分が発表すればあとはきかない
6. 学習集団としての連帯意識、結びつきが
少ない

2. 指導過程の中で、どんな内容で、どんななかで、
バズととり入れることが生徒の課題意識を育きよる上で
効果があるか

3. 各教科に適したバズ、バズに適した教材の研究
4. 生徒の定態、意識をととふまえて、課題意識とバズ
との関連の研究

[5] 本年度の歩み 一概要 ——

1. 研修テーマにもとづいた授業研究
各教科の研修と充実し、6月、10月の二回、授業研究
と行ない、授業観察ととあして、テーマの交流にこめらる。
視察と研修部で、各教科部ごとに具体的視察
をめぐり、事前研究、話し合、授業と事後研究にこめらる。
と全体研究、学年研究、教科研究

[2]本校として願う方向

A. 学習意欲の問題

- 1. 意欲的、自主的に学習に励む態度の育成
- 2. 自らとよむつてよりくま態度の育成

B. 集団意識の問題

- 1. 協力しあつて学習と深め合う集団の育成
- 2. 大がいに抱き合い高め合い、者よ方とひらみ深めていく集団の育成

[3] 研修テーマにまつての基本的な抑え

- 1. 課題意識にまつて
 - 生徒が学習問題と意欲的、主体的に解決しようとする意識という
- 2. バズ学習
 - 同一問題とテーマとして言語(その他)
 - 非言語(会話)活動によつて相互に作用する
 - 小集団学習という

[4] 本年度研修の力点

- 1. 授業の中で一斉、個人、小集団思考の場の研究(各教科、教材に応じて)

テーマにまつての若くは共通理解をわける、基本研修を中心とした研修、教科研において、教科に出るテーマを受けとめ、研修の方向を、学年研において生徒の授業にまつての話し合いと、一昨年度から継続しての復習バズにまつての研究と存続。

- 3. 果外先進校への研修視察による学習
- 1. 昨年度より毎年実施して、全職員と6グループに分け、バズ実践校に研修出張し、視察結果にまつて報告書を作成し、全職員に報告、本校研修の推進に役立てたい。
- 4. 講師を招いた全研修
 - 1. 昨年度から全校で1名中心授業と行い、これを受けて復習バズと行い、全職員で参観研究し、講師とまじえての話し合いと講師の助言指導を仰いでいる。

[5] 向題意識及び抑え

- 1. 全職員のテーマにまつての共通理解をどのようにつけてもらう。(充分話し合つての時間があることも大切である)
- 2. 研修の理論と実践化(日常の授業にまつての困難がある)
- 3. 教科、教材の中でどのようテーマと具現化していくべきか、展望が困難である。(学習不足、実践不足もある)
- 4. 生徒の態度に即した研修であるよう心がけていく
- 5. 評価が大幅に大きく生徒の態度向上に伴う器用かはい
- 6. 他位生徒の学力不足が研修上の妨げとなり、どう解決していくべきか
- 7. 研修と他の行事、分野との関連をどのようにつけていくか
- 8. 研修にまつての職員の意識の向上にまつての抑えがある

第11回全国バズ学習研究集会

集団課題解決学習の実践

— 数学科を通して —

豊川市立中部中学校

1. 意図

教材の精選が叫ばれてから久しい。各方面でその研究はすすめられており、軽重をつけるべき点はどこか、どの教材をどのように指導したらよいかなど、多くの研究がなされている。しかし現状を考えてみたとき、まだ多くの内容を如何に生徒に消化させるかは大きな問題である。毎時間の学習課題は如何にあるべきか、どのような課題によって生徒が生き生きとし、真正面からぶつかることができるかを考えることは有効である。

次に課題解決にあたっては生徒ひとりひとりが学習の内容や目標(課題)を明確に意識し、それに向かっ

て積極的に取り組むことのできる態度が身につけなければならない。このように個々の生徒の個性能力を最大限に開発、発揮することが一方にあるとしても、学習は集団の過程を通らざして達成するとは考えられない。学習は個人による学習過程と集団による学習とが相補、相乗作用をし、人間形成とあいまって進められていかなければならない。とすると集団自体の持つ教育機能は、小集団において最も有効にして発揮されると考えた。

以上のような考え方によって数学科において自己指導の態度形成につながる有効な学習過程の一つとして、

「集団課題解決学習」を実践してきた。

2. 集団課題解決学習の基本的な学習過程(後述)

- ・ 本時の目標(学習内容)を示す。(2分)
- ・ 課題を提示し、それを解く。(40分)
個人思考—小集団討議—全体発表—教師のまとめ
- ・ 本時のまとめと次時の予告をする。(3分)

(1) 個人思考

課題は内容によっては1つの場合も2つの場合もある。そして課題の提示が済むと生徒はまずひとりひとりの力を発揮して課題にとりくむ。これをみっちりやっておかないと以後の集団での学習が深まらない。この間教師は個別指導に重点をおき、個々の学習状況を観察し、それぞれに応じて指示、助言をするが、それは最小限にとどめ、できるだけ生徒の自力を発揮させるように努める。

(2) 小集団討議

個々の考えを出し合って解決をめざして追求する。このとき討議内容を集約、焦点化するためにグループ1枚ずつの小黒板(90cm×60cm)を利用(これは全体発表にも使える)すると能率が上がり、次の全体発表討議に生かすことができる。

(3) 全体発表

小集団で追求した内容を全体でさらに追求し、確認する。

(4) 教師のまとめ

教師が存分に指導力を発揮して補足、解説し、解決のしかたの理解確認をはかる。

3. 実践を通しての反省と問題点

(1) 何をどんな順序で学習するかが学習の始めに示されるので、本時の学習の見通しを持つことができる。できれば多時限にわたっての課題提示がなされると単元の学習の見通しも持つこ

とができ、家庭学習も計画的になされる。

(2) 課題の示し方が並列的ではなく単元の目標となる課題およびそれを解決するための前提となる課題とを関連づけて設定提示することが必要となり、教材の精選と構造化がより必要となる。

(3) 学習活動への参加度、とりくみ方といった態度面は積極的な効果が認められた。特に小集団討議の時の小黒板の利用は多様な数学的思考を紹介するものであり、話し合いの焦点化がうまくいき活発な討議材料となる。またドリル面においては自分の計算順序、方法などを他に問うよい機会でもあり、自己評価、自己実現につながるものである。

(4) 小集団討議にはいる前に個人学習の時間を設けることで個別指導の機会が得やすくなり、また個人思考の結果を踏まえて小集団の話し合いが展開されるのでその質的な深まりが期待

できる。

(5) 小集団討議のとき、グループ内の結びつきのうまくいっていないところは消極的に終わってしまったリ、リーダー級の生徒がいつまでもわからない生徒に時間をかけて説明している場面が見られた。これらは学級づくりに関連してくる問題である。

(6) 理解思考は個人思考、小集団討議において、ある程度深まりを示すが、課題に対する解答の記述の仕方が時間不足のため不十分である。

(7) 学習課題を構造化して提示するところに特色の一つがあるのだが、生徒自らの問題意識をどのように主体化していったらよいかは今後に残された問題である。

(8) 一教科担任の指導は微々たるものである。中学校においては特に学校全体の共通理解にたって研究が進められなければならないことを痛感する。

4. 指導例.

単元 : 一次関数 (直線の方程式)

本時の目標 : (1) 2直線の交点か、その2つの式の連立方程式の解であることを理解させるとともに2直線の交点と他の1点を通る直線の方程式を求めることを理解させる。
(2) 教科における自己指導の態度を養う。

準備 : 小黒板 6枚, プリント

指導過程 :

過程	予想される活動		留意事項と態度の評価
	教師の活動	生徒の活動	
導入	<ul style="list-style-type: none"> 前時の復習をする。ともに本時に関する問題を提示する。 本時の学習内容を話す。 	<ul style="list-style-type: none"> (3, 5), (2, -1)を通る直線の方程式を求める。 答え合わせをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ドリル形式で3分程度やらせ、前時の問題を思い出させる。
展開	<p>課題. $y = 2x - 1$ と $y = 17 - x$ の交点と点 (2, -1) を通る直線の方程式を求めよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 課題を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分でノートにやる。 小集団討議。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人, 小集団討議の場合教科書 P79, P80 を指定し、活用させる。 教科書をよく読み、課題内容のわかったところ、わからぬところがつかめにか。 バズりのときは小黒板で話し合わせる。 教師は生徒の活動を促しているだけで学習内容に介入しない。生徒の話し合いがうまくいこうに助言はある。 他人の意見や考えを聞き、自分の考えが正しいか。 多くの人の前で話そうまくできたか。 グラフの概形をかきこきによって $y = 2x - 1$ と $y = 17 - x$ の交点か2つの式の連立方程式の解であることを知らせる。
	<p>問題. 化簡が2で $x - y = 5$ と $3x + 7y = -5$ の交点を通る直線の方程式を求めよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分でノートにやる。 小集団討議。 教師の話をきく。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題に時間がかかりすぎた場合は家庭学習とする。
整理	<ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめと次時予告をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の話をきく。 	

第11回全国バズ学習研究集会

〈発表要項〉 姫路市立広峰小学校

1. 本校のあゆみ

昭和45年度(開校にあたって)

ひとりひとりのもつ可能性を最大限にひきだし鍛え、育てる教育に徹する。

△児童作品▽

つ	通	ほ	そ	こ	お	お	上	下	お	ほ
ぶ	知	く	れ	ど	か	自	っ	が	か	胸
さ	知	だ	と	も	あ	分	て	っ	あ	が
れ	ほ	見	く	の	さ	な	い	て	さ	の
そ	ほ	せ	な	通	か	っ	ほ	お	ん	通
う		た	ら	こ	ん	て	れ	い	ド	知
だ		く	く	知	の	め	ば	こ	に	ほ
		っ	べ	は	ほ	だ	る	れ	キ	ほ
		な	ら	で				ば	ッ	
		い	ゃ					る		

教育評価の研究(新しい通知簿づくりの研究)



昭和46年度

あゆみの改善を原動力としての学習指導の改善



昭和47年度

評価場面の拡大 (ひとりひとりの学力を正しく評価するために)



昭和48年度

指導過程における評価のあり方

I 研究主題・主題設定の理由

研究主題

指導と評価の一体化 ～一単元の指導過程において～

1. 主題設定の理由

もともと指導と評価は、一体的なものであり、指導を離れて評価はなく、評価なくして指導は成り立たない。にもかかわらず、改めて「指導と評価の一体化」を、ことさらにとりあげなければならないところに、問題の根の深さがある。

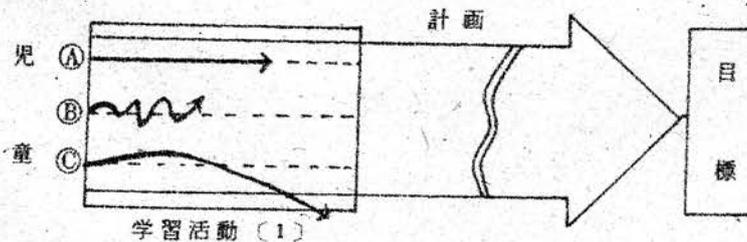
一般に「評価」というと、指導後のテストや、学期末の成績評価を思い起こすのが常で、得られた結果が治療のための資料として活用されれば幸いで、そのほとんどは、期末の成績のための資料として処理されることが多い。言いかえれば、それは、通知簿作成のための(資料)評価であり、指導要録記載のための評価の域を出なかったとも言えよう。従って、その基礎となる資料も、100点満点に代表されるペーパーテストにみられるように、きわめて概括的で具体性に欠けていた。

また、テストを、指導計画を完遂するための、指導法を補強するための道具として利用(濫用)してきたことも事実である。教師の「テストに出すぞ。」と、不用意に口にしたことばに、子どもたちは、どれ程身を細らせたことであろうか。「テストがあって、指導がない。」「教育不在の教育」と指弾されるのも無理からぬことである。現実として、このような評価に対する認識の甘さから、評価を指導から離してひとり歩きさせてきたことは、否定しえない事実である。

本校では、45年学校創設以来続けてきた通知簿の改善研究を通して、「評価とは何か。」を問い続けてきた。それは同時に、「教育とは何か。」を問うことでもあった。子どもの学力を点数に置きかえ、相対的な位置関係を明らかにしたり、格づけしていくことが、教育にとってどれほどの意味があるのかも、その過程で問われた問題である。

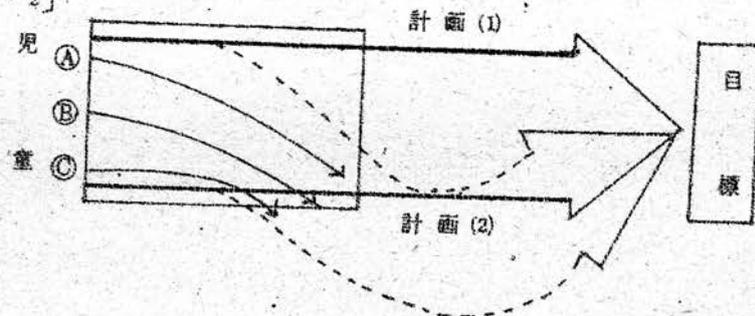
教育とは ひと口で言えば、子どもの全的な発達を有効にうながす意図的計画的な営みである。従って、あらかじめ立案された計画に基づいて指導されていく過程において、期待した効果が上がりつつあるかどうか、予期した目標に到達しつつあるかどうかを知ることが必要になる。教育評価はここに機能すると考えてよい。このことを図示すると次のようになる。

〔図1-1〕



【図1-1】で目標追求のために設定された学習活動〔1〕において、予期した目標に到達しつつあるかどうかを①②③児についてみると、①児は、正常に進んでいるが、②児は遅滞し、③児は別の方向に向って進んでいる。そこで②児については遅滞している原因を、③児については軌道をはずれていった原因を明らかにし、望ましい学習活動が展開されるように、何らかの手だてをこうしてやる必要が生じる。つまり目標追求活動の過程における点検と調整である。場合によっては、【図1-2】のように当初の計画そのものを根本的に検討し、大きく修正しなければならない場合も起こる。

【図1-2】



このような教育評価の「目標追求のための活動を常時点検し、調整していく」はたらくに目を向けていかないかぎり、望ましい学習活動を期待することはできないのではなからうか。

(この点検と調整は、①児童自身(自己評価)②主として教師(他者による評価)③友だち間(相互評価)などによってなされる。)

さて、このようにひとりひとりの子どもに、望ましい学習活動を保障していくには、指導と評価が密接かかわり合って展開されなければならない。では、それをどのようにかかわらせていけばよいのが、次に問題になる。本校ではそれを「指導と評価の一体化」というテーマのもとに、47年度以来2か年にわたって研究を進めてきた。そして本年度はさらに「一単元の展開過程においてどう一体化をはかればよいか」に焦点をしぼり、実証的な追求を試みようとしたわけである。

2. 研究仮説並びに研究内容

ひとりひとりの子どもの持つ能力を、可能なかぎりひき出し、その伸長をはかるには、学習効果を高めるための指導過程を、合理的にしくまなければならない。この「合理的」を「児童の実態に即した」と考えるならば、「児童の実態に根ざした学習指導の展開」と言い換えることができる。本校では、この児童の実態をできるだけ科学的にとらえ、指導と結合させていけば、ひとりひとりの学習効果を高めることができるのではないかと考えた。

上記の前提に立って、実証の範囲を一単元の指導過程にしぼり、指導と評価を次のような過程で一体化しようとした。

(1) 単元の目標、内容から指導計画ならびに評価計画を立てる。

(2) 指導効果を高めるために、その単元の学習の前提となる条件を整える。

ア 前提条件テストの実施(前提となる条件がどの程度満たされているかの確認)

- イ 勢ぞろい学習①(前提となる条件を満たしていない児童に対する再指導)
- (3) 授業効果を高めるために、
 - ① 事前テストを実施し実態をとらえる。
 - ア 指導計画の修正⇨指導案の作成
 - イ 個々の児童に即した授業展開の工夫
 - ② 授業過程における評価活動のしくむ。
- (4) 授業効果を見るために、事後テスト、把握テストを実施する。
 - ア 個人として、全体として学習効果を見る。
 - イ 勢ぞろい学習②(学習効果の低かった児童に対する再指導)
- (5) 問題点を分析し、改善案を考える。

この一連の展開を図示すれば〔図1-3〕のようになる。

概略は以上の通りであるが、これを授業前、授業中、授業後の評価活動という観点から、それぞれについて今少し詳述することにする。

(1) 授業前の評価活動

ア 指導計画の素案作成

単元の目標・内容から、指導内容の程度、展開の手順、学習形態、教材、教具の程度と提示の仕方などの概略を考えておく。

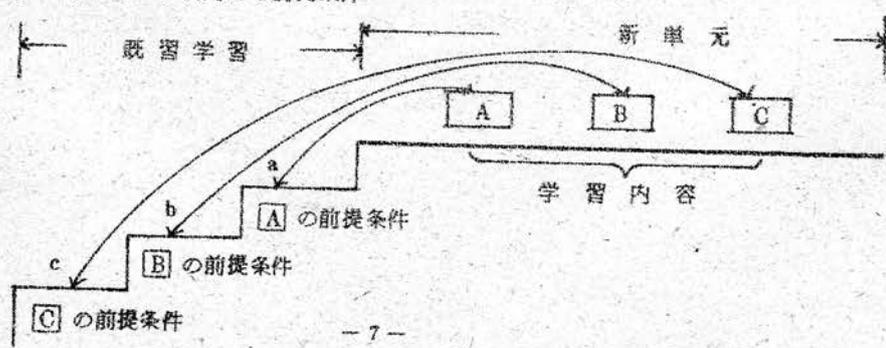
イ 目標、前提条件、事前、事後テスト、即時確認内容の決定(評価計画の立案)

目標一計画一実践一評価を、ひと続きのものとして考えようとするば、まず、単元の目標をいくつかのまとまりのある下位目標に分析し、各下位目標に対応する前提条件テスト、その時間の目標・内容に対応する事前、事後テスト、授業途中評価としての即時確認事項を明らかにしておく。

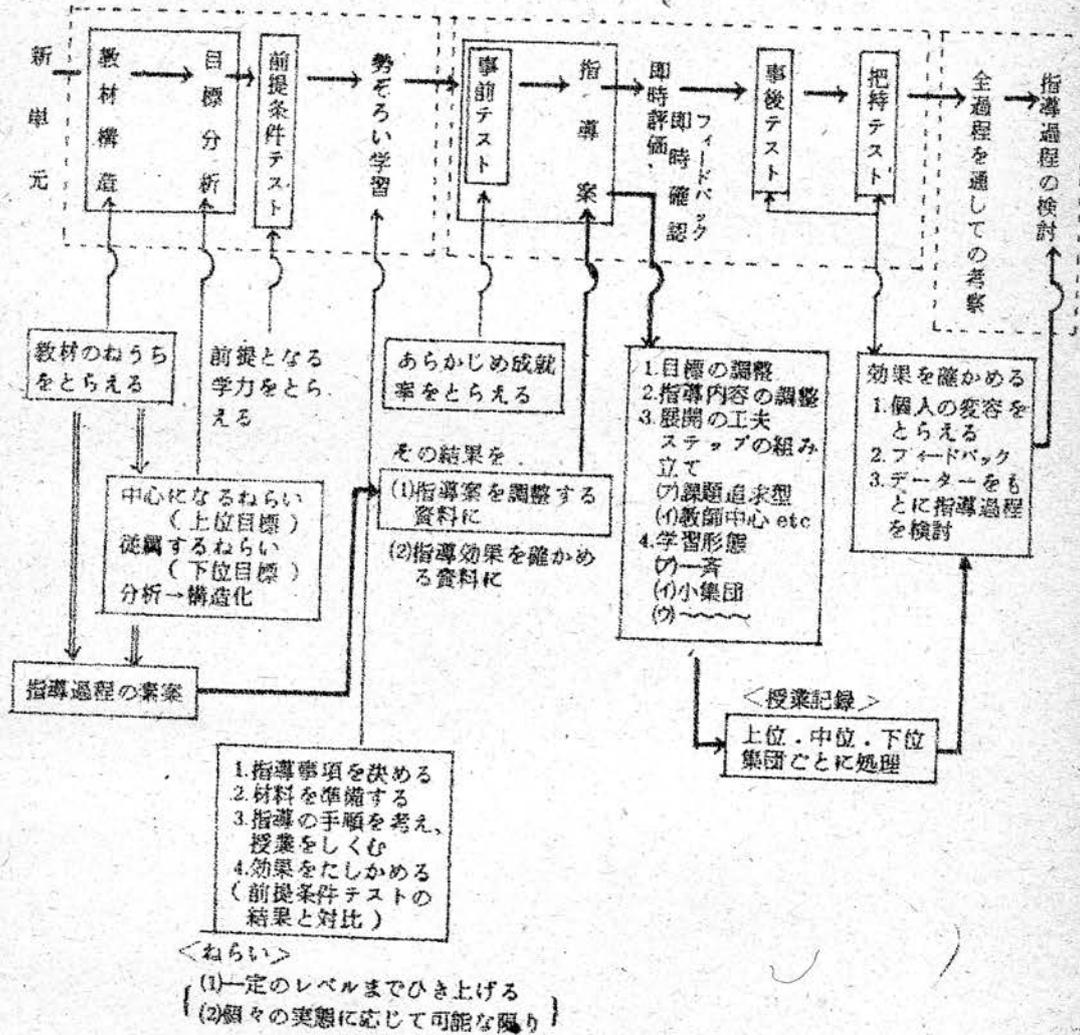
ウ 前提条件テスト

前提条件テストとは、その単元の学習を進めていくうえでの前提となる学習内容がどの程度満たされているかを確認するためのテストである。従って、前提条件は、前時の学習が前提となることもあるし、数時間前とか、前の学期、長いものになると、前の学年の内容が前提条件となることもある。全く新単元の場合は(教科によって異なってくる)前提条件が見出せないものもある。新単元の学習内容と前提条件の関係を図示すると、〔図1-4〕のとおりである。

〔図1-4〕 新単元の学習内容と前提条件



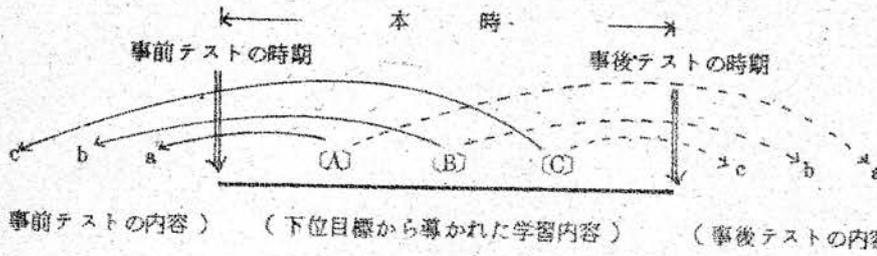
〔図 1-3〕 指導と評価の一体的な展開



エ 事前テスト

事前テストを実施する意味は、授業前における児童のその時間の学習内容に対する理解の仕方、理解の程度をあらかじめ把握し、指導計画の立案や、授業の展開に際して、ひとりひとりの学習状況に合った指導を行なうため（素案の充実と修正）と、授業前の児童の実態が、その授業に参加することによって、どれ程の効果があつたかをみるためである。従って授業後には、再度事前テストと同一ないし同程度の事後テストを実施する。本時学習内容と事前、事後テストとの関係、並びに実施の時期を図示すると〔図 1-5〕のとおりである。

〔図1-5〕 本時学習内容と事前・事後テストの関係、並びに実施時期



(2) 授業中の評価活動

この評価活動のねらいは、学習の進行途上で児童個々の動きをとらえ、学習活動を高めるための手だてを強化していくところにその特長がある。従って、あらかじめ前提条件テスト並びに事前テストの結果をもとに個々の児童の問題点を資料として整理しておくことが必要である。主なものをあげると次のようになる。

- 予想との落差発見とフィードバック…… あらかじめ各ステップ毎に即時確認事項を決めておいて、学習状況に応じてチェックし、即時強化をはかる。
- 事前テスト結果を生かした指名・発問…… 事前テスト結果をもとに問題点を座席表等に記入(記号)、指名、発問の際活用する。

(3) 授業後の評価活動

ア 授業効果を見るための事後テスト

ここでいう授業の効果とは、前述の前提条件テストに合格し、事前テストでは不合格であったものが、授業に参加することによって、事後テストに合格した者を授業効果の対象者とする。

授業効果率は〔図1-6〕のように、Cの児童に対するC+Dの児童の比で算出することができる。

〔図1-6〕 授業効果のとりえ方

型	前提条件 テスト	事前 テスト	事後 テスト	備 考
A	○	○	○	授業を受ける条件は整って
B	○	○	×	いるが不要なもの
C	○	×	○	授業を受ける条件も整って
D	○	×	×	おり、必要もあるもの

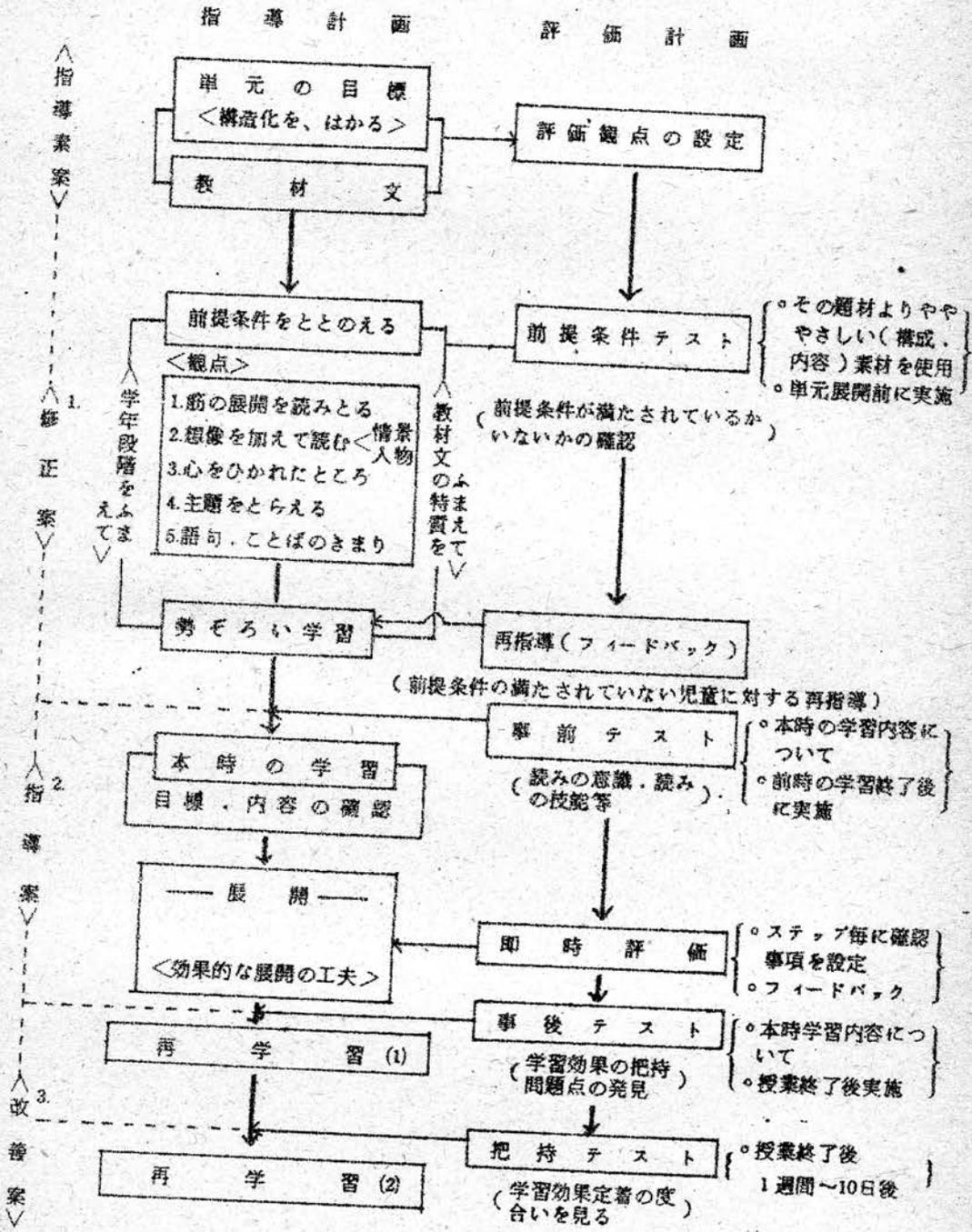
$$\text{授業効果率} = \frac{C}{C + D} \times 100(\%)$$

上記の方法によって、小問・中間・全体をとおして授業効果率を算出し、また、個人別に学習効果をとらえる。

Ⅲ 実践例

1. 読解鑑賞指導と評価の展開

〔図2-1〕 読解鑑賞指導と評価の展開



42 探究学習(留意点)

(表3-9)

	教 師	児 童
事 実 提 示	<ul style="list-style-type: none"> ・児童をひきつけられるもの 資・意外性のあるもの 料・対比・関連づけられるもの ・中心概念を支えるもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・意外性→主体的見通し ・読みとる 部分→全体(傾向性)
問 題	<ul style="list-style-type: none"> ・問題形式になれさせる。 (なぜ……は……なったのだろうか) ・単元終了時まで書きとどめる。 ・ひとりひとりに問題を作らせ統合問題にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりひとりが主体的に問題を作る。 ・自作の問題を単元終了時まで書き残す。 ・仲間同士で問題を比較し違い、ずれの発見修正をする。
予 想	<ul style="list-style-type: none"> ・予想に拡がりをもたせる。 ・予想を助ける補助資料を準備する。 ・誤予想をたいせつにする。 ・小集団学習により予想をしぼる。 ・板書に工夫をこらせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・賛成、反対、同類予想をみわける。 ・自己の予想、賛成予想を記録する。 ・自己予想の理由づけを考える。
ね あ わ せ ↓ 仮 説	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの視点をしぼり、たしかにする ・話し合いの交通整理をする。 ・時間的配慮をする。 ・小数意見、弱少理由もたいせつにする。 ・資料提示により効率化をはかる。 ・小集団学習により仮説の徹底をはかる。 ・仮説の書き方に配慮する。 ・問題は△△△と○○○ (×××にちがいない、だからだ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体例を出して理由づけをする。 ・発表のし方に留意する。 ・仲間の意見の細部まで聞きとる。 ・即時に賛成反対の意志表示、理由発表をする。
検 証 計 画	<ul style="list-style-type: none"> ・仮説の要素に朱線を入れさせる。 ・何を何によって調べるのかを話し合いの中でたしかにする。 ・小集団学習により条件をととのえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しを持って視点を立てる。 ・小集団で調べてくる役割をきめる。
検 証	<ul style="list-style-type: none"> ・検証資料書物を準備する。 ・トラベン利用による個人検証を全員に拡げる。 ・小集団作業により下位グループを参加させる。 ・検証資料の限界に留意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を十分に活用する。 ・生活の場すべてから資料収集する。 ・自己解釈入りの資料にする。 ・グラフ、図表の多用でわかりやすい資料作りをする。 ・検証資料をファイルする。
結 論	<ul style="list-style-type: none"> ・検証結果と仮説を対比させ、妥当性、不当性をみきわめさせる。 	

N05

具体的実践例

本年度中播バズ研究会が10月30日ですので
授業実践例は当日配布

第11回バズ学習研究集会

自己実現をめざす

課題設定とその一考察

滋賀県神崎郡五箇荘小学校

教諭 高村 博

1. テーマによせて

- 授業の中で、ひとりひとりの子どもが「自己実現する」とは、
どういうことか。
- 子どもたちの「自己実現をめざす」授業は、どのようにして
しくまれるか。そのしくみを構築するものは何か。

この二つの問いに答えることに、授業を発想する基盤をおき、
子どもが「自己実現する」姿にわけ入り、みつめようとする視点
から授業を発想し、子どもの「自己実現」に働き合うものを授業
のしくみの中で捉え直し、自らしくもうとしてすぐたて直してい
く新しい発想の授業をつくりだそうとしたのである。

(1) 子どもの「自己実現」の姿は、

- 子どもが「自己実現する」のは、行動するときである。
- 子どもが「自己実現する」原動力となるのは、子ども自身の
情感や感動である。
- 集団の中で自分をせいっぱい出しきり、ぶつかり合う中で
こそ「自己実現」がなされる。
- 子どもの「自己実現」は、学習過程にこそ実在する。

- (2) 「自己実現をめざす」授業の手法を要する基盤として、
- ・学習の内容が、ある確かなものの姿・形としてあうわられていなければならない。
 - ・ひとりひとりが、必然の行為としてものごとがかわっていく活動のすじを描かねばならない。
 - ・授業の場を、互いの思いや考えを触れ合いふくらませ合う場としてつくり出さねばならない。
- つづめて言えば、「自己実現をめざす」授業は、内容と子どもが正対し、確かな手ごたで関わり合い、授業の場に実像が結ばれることである。授業者はひたむきに子どもをみつめ、子どもにとって授業がいかに充実の体験となりうるか削いづめることであり、授業者としての自己のありようを問い続けることである。

2. 自己実現をめざす課題設定

学習の中で課題が課題たるためには、課題を意識する子どもの状況を考慮に入れなければならない。子どもの「課題意識の持ち方」には、(a)理解中心、他者依存の課題の持ち方、(b)活動(行動・操作)中心、自主的な課題意識の持ち方、の二つの場合が考えられる。こゝでは、

- ・具体的な学習の場で、どのような問題場面を与え、子どもの「課題意識」の醸成をはかるか。
 - ・子どもの意識にどのようなパターン作りをさせることが、課題追求を持続させ、その発展・深化をうながすか。
- を実践例をあげて考察し、課題設定の一つの手法を提案する。

実践例

5年算数「整 教一余りで分ける」の授業

- (1) 課題が生み出される過程——本時に至るまでの過程と考察——
- ア. 指導内容と課題設定 〇学習課題、指導内容

①事前テスト(2人)

- 事前テストの結果を話し合い、学習課題を設定しよう。
 - ・整数は奇数と偶数に分けられる。
 - ・奇数と偶数の見分け方。
 - ・奇数・偶数の和差積を考える。

②余りで分ける(3人;本時2人)

- 身長順に並んだ2人が、3チームでポートボールの試合をする。その分け方は?
 - ・観点を決めて、整数をいくつかの集合に類別する。
- ある数より大きい数と5大きい数の和は、奇数か、偶数か? そのわけは、... (本時)
 - ・集合間の関係から、奇数・偶数を判定する。
- 0から9までの積の表から、奇数25個、偶数75個になるわけを考えよう。
 - ・奇数・偶数の積の関係から、倍数・約数の意味とその関係につなぐ。

③倍数と約数(4人)

- 0から9までの積の表をもとにして、倍数って? 約数って? その関係は? (以下略)

- 教科書の「奇数・偶数」の設問そのまま事前テストをしたが、結果は60%と良好で、「奇数・偶数の用語は全員知っていた。しかし、「0は奇数か、偶数か」「偶数は、2で割り切れる整数(a)で、 $2 \times a$ で表わされる」といったことは、新しい問題とし、奇数・偶数の和・差・積を考える問題は、具体的な整数を想定しては考察できても、{整数全体}を{奇数}と{偶数}の2つの集合に類別しての考察はできていなかった。そこで、
- 子どもが、これらをいかにして「無限集合」である抽象的な数の世界まで拡張し、その過程でどのような論理で思考し、どのような具体的操作を施すかの追求にこの単元の課題をおいたのである。

1. 子どもが生み出す課題と子どもの読みから設定する課題

。「0は奇数が、偶数が」「ある整数が奇数が、偶数がを見分けるには」といったものは、課題というより、テスト問題そのものであるが、「そのわけ」「よい方法」となると、種々の理由づけや方法が考へ出され、多様な見方・考へ方や操作があるパターンとして抽出される。これらを比較・検討する過程で、自他がきわ立ち、同化され、より一層の課題化が進む。このようにひとりひとりの子どもに考へるよりどころが見つかり、課題が自立し、課題追求への意欲が醸造すれば、あとは、より価値ある方向と、より能率的な順序性を教師のガイダンスでもって、子どもが「作り出した」と意識する手順で、共同の課題として設定する。とは言之、教師側からの一方的な提示は、せっかく醸成した追求意欲に水をさすことになる。子どもが「やりがいのある」、「やってみたい」と認識する課題も、子どもの興味・関心、能力・思考様式・追求力の持続性等を読みとり、価値づけ、順序づけて、学習課題として設定する。

。ところで、一連の課題をもって、40人の子ども全員に等しく「変革」を図ろうとすることは、いろいろな能力差、認識のしかたの差異からいって、無理なことは明らかである。おとなの抽象的な論理で考へられた内容の順次性を子どもに当てはめようとする期待。学問体系から導き出された内容の領域区分が、一見整然としているという理由で、他の領域とのかわりを断ち切って考へる無関心さ。が、さまざまな錯覚を生み、往々に子どもとのずれやへだたりをつくるものである。このように考へると、40人いれば40通りの学習課題が必要になる。そこで、課題は個々の子どもが自立させ、設定するものと考へたいのであるが、40人が「共通課題で」、「一つの課題で」という部会の申し合わせがある。とすれば、この

不可能を何とか克服する手がかりとして求められるものは、(事前テストの結果や日頃の観察から)何人かの子どもに焦点を絞り、その焦点を当てた子ども(手がかりを得るために着目したい子ども)に対して、具体的な目標を立て、その子どもを通して、その子どもを追うことによって、全体を見やすくし、個々の子どもの微妙な動きを捉えようとするのである。

(2). 個人学習における課題追求の様態

(ア) 子どもの追求の様態を捉える視点と個人の様態

ひとりひとりの子どもの追求の様態をどう捉え、どう生かしていくかが、次の問題である。この場合、個々の子どもの様態は、ある人間的なパターンをもって、そう急激な変化はないようにも思えるし、また、課題の解釈の度合によって、その態度変容するようにも考えられる。ここでは、その追求の様態を「課題に対する解釈の度合」と「解釈を生み出す操作カンの2面から捉えてみる。

整数に対する 解釈の度合 解釈を生み出す操作	「ある数にどんな数を選んでいるか」		数を多くして			
	1つの 整数で	2つ以上の 整数で	奇数・偶数意識せず	奇数・偶数意識して	不足	確信
立式にまよいがある $(□+3)+(□+5)$ と捉え、具体的な数をあてはめて 表や数直線で、和の変化に着目して 整数を奇数・偶数に類別して $□ \times 2 + 8$ と変形し、 $□ \times 2$ は偶数として	④ ⑤	⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳		⑩

(1). 抽出グループ (抽出児) を本時の学習に位置づける。

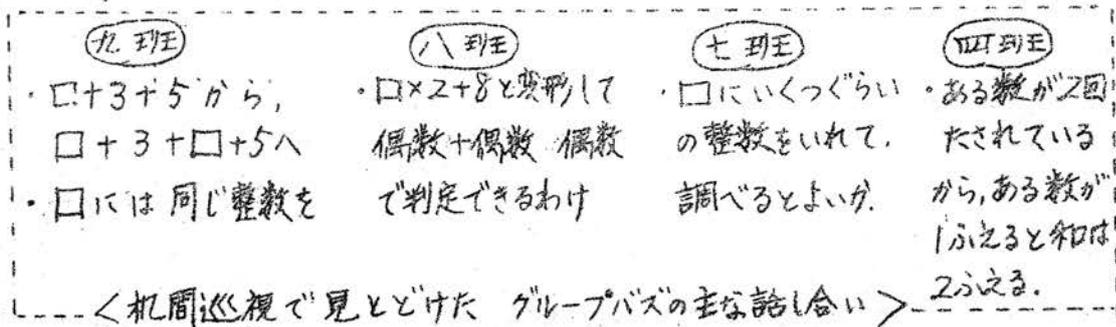
個人学習での子どもの追求の様態を先述の枠組で位置づけたとき、気になるのは9班の4人 (国, ④, Y, ①) である。特に, 国, ④は $(\square+3)+(\square+5)$ の立式ができず, $\square+3+5$ とし, \square に入れる整数も一つの数というあらわれである。

カルテから	国子は、算数が苦手、他を簡単に受け入れるようでも、自分のものとならず、自信ある言動とならない。	④男は、疑問や問題提起はできるが、思いがちいや、自己矛盾に気づくのが遅い。筋道立てて考えることが苦手。	Y子は、自分の考えに自信をもつまでに手間がかかるが、着実に自分の筋で考えを組み立てる。	①男は、直観的に洞察・把握する力はあるが、自分の考えを固守する面が強く、自己流になりがちである。
シートで	論述がはっきりしない。しごとの見通しもたてないまま書いている。 $2 \times \square + 8$ の方向に高めない。	$\square+3+5$ と立式したようだが、両方とも5とするとも叙述している。もつ他の数をとしながら入れない。	2数は偶数も入れているが、 $a+a+8$ と変形しているの、 $2 \times a$ も偶数と促させたい。	操作・解説とも進んでいるが、わかりやすい記述ではない。グループの話し合いの中でどんな働きをするか。

(3) 課題追求の過程と自己実現の様相 (本時の学習記録から)

ある数より、3大きい数と、5大きい数をたすと、偶数になるか。奇数になるか。そのわけは、

<学習課題の確認>



$0+8=8$ だから、偶数とわけづけた意味 (国)



$\square + (3+5)$ が
 $(\square+3) + (\square+5)$ が
 \downarrow
 $(\square+\square) + (3+5)$
 \downarrow
 $\square \times 2 + 8$
 \updownarrow
 $\square \times 2 = \text{偶数}$
 である。
 $\square \times 2 + 1 = \text{奇数}$
 である。

\square に 0 を入れるのは?
 ある数に 整数 0 を
 \downarrow
 0 も整数 \rightarrow 偶数と奇数の場合に分けて
 0 は偶数
 \updownarrow
 0 は整数の一番小さい数
 \updownarrow
 0 は偶数で 奇数・偶数 交互に並ぶ

表を使って ある数が 1 ふえると和は 2 ふえる。
 数直線を使って
 偶 奇 奇
 0 1 2 3 4 5
 3 大きい数
 5 大きい数
 ある数が偶数のとき 奇数+奇数で偶数
 ある数が奇数のとき 偶数+偶数で偶数

具体的な数で 偶数、奇数 1つずつは
 \downarrow
 0, 9 を 1 の位 調べたら だけでは 整数は 奇数と偶数 に分けられる。
 整数は無数にある。

以下略

授業終了直前に行った5分間テストで、次のような会話文で

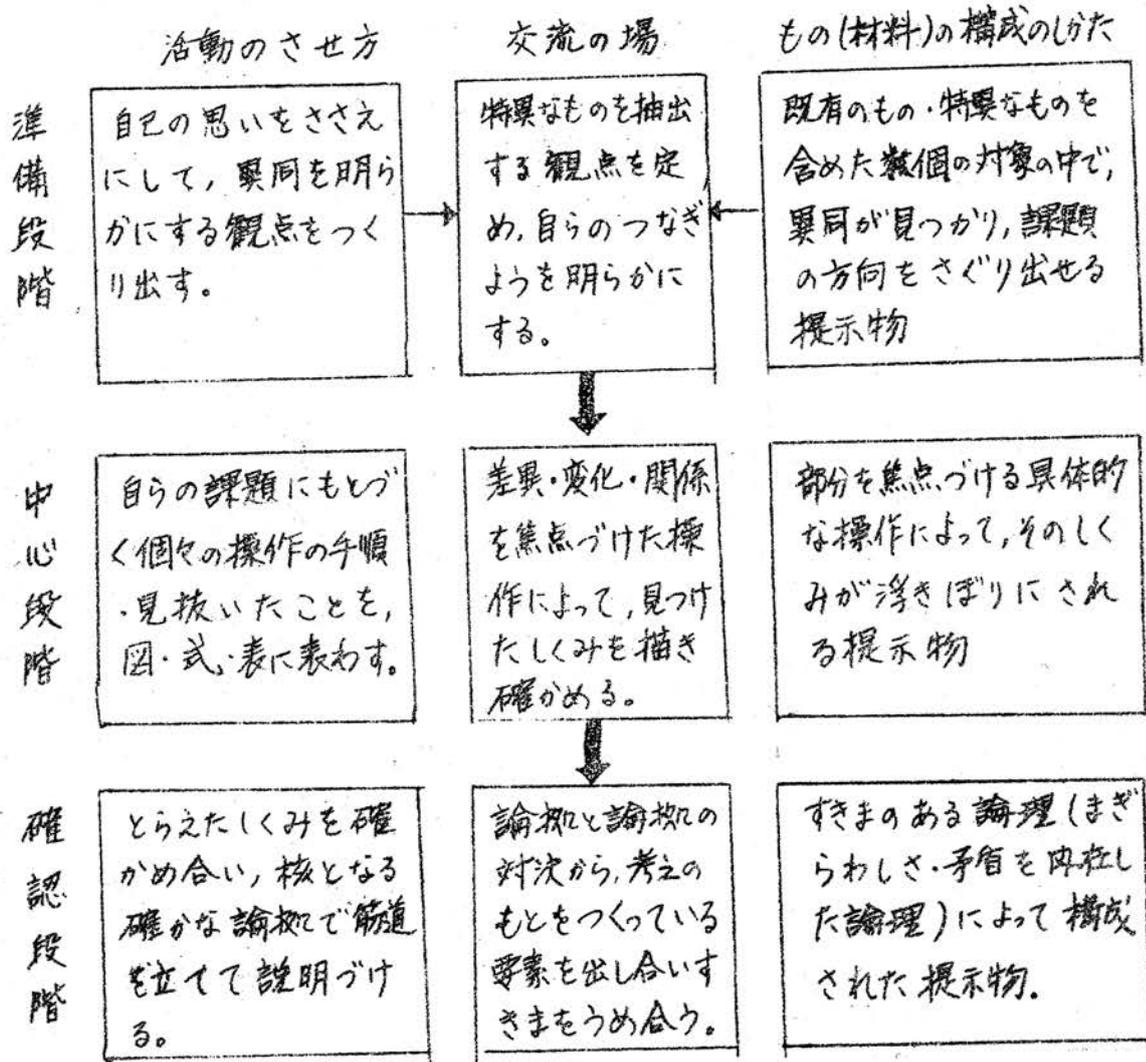
姉「正ちゃんの組は、全部で何人いるの。」 正「37人だよ。」
 姉「男子と女子とどちらが多いの。」 正「女の子が2人多いかな。」

<1> 始め録音で、<2> 次に文章で、<3> 最後に線分図で示すといった
 変った提示のしかたで、これに対する子どもの反応は、次のようであった。

判定	問題の提示の仕方	問題の提示の仕方		
		<1> 80名 録音を聞いて	<2> 85名 問題文を見て	<3> 87名 線分図を見て
正しい	理由づけを分析する視点 ・理由なし	④		
	・くわしく言っているから ・ $(87-2) \div 2 = 17.5$... 男 $17.5 + 2 = 19.5$... 女	①	⑬	
正しい	・2人多い「かな」に目をつけて	⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲	
	・全体と差に目をつけているが、構造がつかめない ・ $(87+2) \div 2$ が割り切れない $(87-2) \div 2$	⑦ ④ ⑩ ⑧ ⑦ ④ ⑩ ⑬ ⑫ ⑬	⑮ ⑱ ⑲	⑳ ㉑ ⑳ ㉑
ない	・全体と差に目をつけ、奇数偶数を使って説明	正答 ④ ⑫ ③ ⑧		
	・全体は88人では? 差は1人ではないか?	⑨ ⑱		○男子 □女子 数字出席番号
無答	・白紙ではないが問題文を書くなどで判定がつかない		⑮	ローマ字は抽出見

最後の正答率は60%弱であった。ここでも①男は特有の対応のし方をし、男17.5人 女19.5人としておさまりが之っている。「2人多いかな」と自信のない答之をしているから、正君の答之は「正しくない」とする子に対し、もっと論理的な思考を記述させ、確かな自己実現のできる子(算教をする子)にしむきたい。

3. 「自己実現をめざす」授業構成の手法



第11回全国バズ学習研究集会

ひとりひとりが意欲的に取り組む学習課題

兵庫県 竜野市立 小宅小学校

1. はじめに

過去3年間の取り組みの中で バズ学習は 人間関係を促進し 学習の参加度を増し 豊かな人間関係によって 競争現象はなくなり 互いに援助し合い 追求し合い 協力し合っていく 民主的 共同的な性格 態度 行動様式が 定着し 学習を楽しめるものになっている。

ところが バズ学習の指導目標である 認知的目標と 態度的目標のうち 認知的目標 別なことばでいえば 学力を高める点で いささか疑問を生じるようになった。

そこで 認知的な面 (ひとりひとりの学力促進)の研究を 強力におし進めるために 学習課題の問題に取り組んだ。

2. 研究の視点

- 教材研究によって 系統化した内容を 課題として与え バズ学習の質を高める。
- ひとりひとりの児童の学習を促進するための 自己の問題としての 取り組みせ方。
(学習の構造化)
- 相互作用や集団過程による 拡充 深化の方法。 (仲間意識)
(ひとりひとりの自主性)

3. 研究内容

本年度は 国語科に 焦点を絞る。

(1) ひとりひとりの自主性を育てる。

ひとりひとりの子どもが 学習課題に 真正面からぶつかり 意見を出し合い 「ああ わかった」と ひとりひとりに かえていくような学習を進めたい—とは わたしたち教師の 願いである。このように意欲的に取り組む構えとは どのような構えであろうか。

- 事前テストの実施
- まず 文が 読めるようになる。
- 問題点や疑問点が 言える。
- 自分の考えを持つ。—〈ひとり思考〉

すべての学習は ひとりひとりの思考の上にならって進められる。ノートに書く。

- 友だちの意見を聞いて比べる。—〈グループ、全体での話し合い〉

- 自分のものでまとめ 次へと発展していく。
- 文章の心を心とした音読ができるようになり 作者の意図 表現のまぐれている所なども含めて感想がかけられる。
- 自己評価をする。(学習の途中 終了後)

(2) 心から支え合える仲間づくり

子どもはひとりでは育たない。バズグループ 大きくは 学級集団の中の人間関係がうまくいけばその中のひとりひとりもまたうまく伸びていくことができる。

- グループで考えたり 完成させたりする喜びを持つ。(学習 清掃)
- 学習場面における望ましい相互作用を強力に指導する。
(全員発表 聞く態度のよいところ 話し合いのまとめ)
- 何かの教科のリーダーとして だれもが活躍し ひとりひとりが場を持って安定している。
- 理解面が拡大できる。(最も大きい位置をしめる。)

個人 ↔ グループ ↔ 全体

というように 望ましい相互作用によって自分自身が 高まっていることが はっきりとわかり 学級をひとつの集団として成長させることを考えるだけでなく 学級が 学習のための望ましい集団として発達していくことにも大きな意義が見出せると思う。

(3) 子どもの 読みを深めるための 学習の 構造化

- 教師自身の教材への取り組み
 - ・ 主題 構成 標題 用語 情景や心情の表現などから教材文を 検討する。
 - ・ 作者や作品について調べる。
 - ・ 指導の目標をおさえて 認知 態度の両面から計画を立てる。
- 子どもの実態をとらえる。
初発の感想は 印象的 個性的であり 疑問点やつまずき 読みの深さや傾向などもよくわかる。
- 学習課題を設定する。
教師の教材理解と児童の感想をもとにして 児童と共に全体計画で 設定する。
- 読みを深める
 - ・ 「ひとりひとりの自主性を育てる」というところで述べたように ひとり思考 — グループ — 全体へと進み 最後には 自分のものでしっかりと定着させたい。これら一連の学習を子どもが自らやろうとする構えへと配慮する教師の役目は大きい。
 - ・ 教師の発問
発問は 学習のねらいを達成するためのものである。学習課題の 解決のために方向性を与えそれを突破する手がかりを意識化させるようなものでなくてはならない。

- 学習結果の評価。
 - ・ 課題への取り組みと到達度について学習の途中、終了後 相互評価や自己評価を行なう。
 - ・ 一単元の学習を終えた後、ひとりひとりのノートを点検する。
 - ・ 事後テストを実施する。

以上述べてきた(1)(2)(3)は はらばらのものでなく、いつもからまりつつ伸びていくものである。従ってその中のひとつをはずしても学習は成り立たない。

4. 課題設定について

(1) 適切な課題の設定は教師の最も重要な仕事であり、教師の教材に対する認識の度合が学習を左右する。

- ・ 教師の教材解釈の深さ
- ・ 子どもの思考過程のよみの深さ (子どもの実態把握)
- ・ これらを組み立てる教師の力量。

以上の観点から本年度は、学年ごとの教材研究、児童の思考過程の研究と共に、国語の分野別研究(物語文、説明文、詩)の組織を持ち、適切な学習課題のあり方、課題への取り組みせ方などを検討した。

① 物語文の場合では、児童の感想をもとに人物の気持ちに焦点をあてたものと、場面の流れやできごとにより焦点をあてたものの2つの視点から課題を構成し、授業をした結果、場面を追うよりも登場人物の気持ちに焦点をあてた授業を進めた方が、子どもたちの中での波紋の広がり大きいことを見出した。

説明文の場合では、段落相互の関係を中心にした課題(段落ごとに要点をまとめよう)はおちなおされることが多い。ただ単に説明していることをつかむのではなく、中味にふれ、感動をもって読ませるためには、内容的におさえたい課題(環境に応じて生きているとはどんなことだろう)の方が、意欲的な学習が展開された。

詩の場合、教師としては、課題の方向づけを持っているが、物語文や説明文のように、はじめに一時間として全体計画を立てるとイメージがこわれる気がする。そこで「すきなところ」というように印象や感動から入る方が新鮮であると考えた。

しかし、これらは、学年により、児童の実態により、一様ではない。

(2) よい課題の一般的基準

- ① そこに含まれる情報を整理し、単純化しやすいような課題。
- ② 次の課題を生み、新しい学習へと発展性のあるもの。

- ③ 応用のきく機能的な知識 概念 原理 方則が得られる課題。
・適度な不明確さ・困難さ・複雑さを含んだ課題
- ④ 話し合いによって解決したり発見したりすることの可能な問題意識を秘めたもの。

子どもの学習活動の面から考えると。

- ① 課題の提示に答えて積極的に反応するもの。
子どもの要求水準とか理解構造に関連。
- ② 一つの課題が解決されるとそれを基盤にして次の課題がおのずから解かれていくもの。
- ③ 課題解決に要する時間が適切なもの。

5. 課題の系列と取り組ませ方

〈一単元をとらえての 実践は別紙〉

- 1) 教材の目的
- 2) 内容をつかむ (教材観)

教材解釈の深さにより課題の系列、提示の仕方がかわる。
教材内容の把握 (何を中核にするか)

 - ・ 現情を理解させるのか。
 - ・ 原因を追求するのか。
 - ・ 事実から改善を期待するのか。
- 3) 児童の実態
- 4) 認知的目標と態度的目標を適確におさえる。
- 5) 課題設定
- 6) 指導過程
- 7) 評価。

○ 1 時間の指導過程

ねらい	課題を発問の形で 教師の発問	課題に対して予想される 児童の反応 児童の活動	評価
<p>指導過程にそった ねらい</p> <p>経験・知識の想起 目標を明らかにする</p> <p>目標となる知識や 技能の獲得</p>	<p>準備 (導入)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ レディネスを基調とした課題 ○ 各人の課題への分類活動 (個々に徹底) <ul style="list-style-type: none"> ・ 一定時間取り組ませる。 ・ 自分ではできるかできないか (予想がたつ) ○ 初発行動 (グループで情報交換) <ul style="list-style-type: none"> ・ $\frac{3}{4}$ くらいができそうな時 余韻を残して次の段階へ。 ○ 課題への取り組みの基本訓練をしっかりと身につけさせる。 <p>中心 (展開)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 相互学習を基調とした課題 ○ 共同で思考するのが中核 (情報交換や相互援助) ㉑ 態度を大切にする。協力や支え合いをしっかりと残しをつくら ない。 ・ みんなが平等の立場で話し合いができる。 ・ 結論を出すことにこだわらない。 ・ 友人の意見をよく聞く。(特に優秀児) ㉒ グループで解決しなかった問題を出し合い 結論を出 (たばねる) ・ 個 (グループで情報交換した後の個) の発言を大切に する。 ・ 対立・考えのゆきづまりなど 問題追求の山場を期待する。 ↓ 克服した時子どもの思考が 変容する場と考える。 		<p>その都度の即時評価 (自己評価を含む)</p>
<p>個々に定着 次時への課題確認</p>	<p>確認 (終結)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 終末段階における課題 ・ 焦点のところをしっかりとおさえる。 教師の出番 ・ 書くこと。記録にのこすことを重視し 学習のあとを残す。 ・ 個々に 定着させる。 ・ 次時の 課題をつくる。 		

6. おわりに

ささやかな研究を進めてきたが子どもたちの理解の深化拡充をもっと高めるため教科の本質に即した課題設定の研究を深めていく必要にせまられる。

ほんとうにひとりひとりの子どもに力をつく学習をするため教師自身の教材解釈や課題を深めるための切りこみ等問題は山積している。

第11回全国バズ学習研究集会

相互作用を生かした学習指導

— 課題の条件と評価 —

春日井市立高座小学校

1. はじめに

昨年来、バズ学習の理論をふまえながら課題と評価についての実践的研究をすすめてきた。昨年度は課題と評価に視点をおいた研究ではあったけれど、どちらかといえば「相互作用を生かした学習指導」についての基礎的、全般的な研究でもあった。

それは、バズ学習をとおして、全児童が意欲的に、しかも楽しく学習できるようにすること、そして、「動きのある学校づくり」の体制確立をまずもってすすめるためであった。

本年度は、昨年からの実践を基盤にしなが、よりよい学習課題の設定と、それにとまう学習過程における評価（即時評価）のあり方をさらに追求するために標記のような研究主題を設定した。

2. 研究の方針と方法（基本的な態度）

(2) 方針

なぜ、わたしたちはバズ学習をするのかという基本的な立場をもういちどこではっきりさせたい。それは、バズ学習をすすめることによって

ア、認知目標と態度目標の同時達成ができる。

イ、児童の学習参加度を高めることがで

きる。

ウ、指導上必要な評価と自己評価が容易にできる。

エ、これらのことが学習指導上のあらゆる領域において可能になる。などの効果を期待したからである。

テーマの設定にあたっては、頭初にも述べた教育体制の確立と、学習の効率化を、よりいっそうすすめて、児童の理解を深化拡充させるために、日頃の実践を焦点化していこうというねらいがあった。

また、わたしたちは課題と評価の問題に対する研究活動に終始することなく、

- ・学習目標の具体化
- ・具体的な学習課題の構成
- ・課題解決へのとりくみとその援助指導
- ・学習効果の評価方法

など、これら一連の実践的研究をとおしてテーマに迫ろうとした。

(2) 方法

研究をすすめてきた基本的な姿勢は次のとおりである。

ア、毎週可能な限り1回の現職教育をもち、これを研究の核とする。もちろん毎日の実践を土台としていくことは、いうまでもない。

イ、全職員が公開研究授業をし、研究主題にもとづく実践上の問題について協

議する。

ウ、現職教育においては、授業研究の他に、理論研究、輪読会等をし各自の見識を高めていく。

エ、学級集団の成長と個人の向上をめざし、各教科はもちろんのこと、道徳、特別活動、生活指導のすべての分野にわたり、研究の対象とする。

オ、全体協議はバスによって行ない、全職員のより積極的な参加を求める。

カ、研究協議や授業実践等の記録を累積し、それを通して研究上の問題点と今後の研究の方向を明らかにしていく。

キ、現職教育委員会を構成し、研究推進のための方向づけをしたり、問題提起をしたりする。

なお、研究授業の協議にのぞむ態度として、

- ・おせじを言い合う場ではなく、思ったことを正直にどしどし言い合うのが授業者へのエチケットであること。
- ・授業者の反省が深まることによって、授業者自身が成長すること。

を、お互いに確認し合ってすすめている。

3. 実践の中で

(1) 授業研究の視点

わたしたちは授業研究をするとき、研究の主題である「課題と評価」に焦点をあわせ、次のような視点を定めて研究を深めてきた。

ア、課題前の授業は適切であったか。

イ、課題は適切であったか。

ウ、課題に対する児童のとりくみのようすはどうであったか。

エ、課題後の指導は適切であったか。

オ、教師の評価は適切になされたか。

カ、評価後の教師の指導や次の課題に対する事前指導は適切であったか。

キ、子どもの自己評価や相互評価は適切であったか。

ク、学習の訓練が、どのようになされているか。

(2) 授業の流れと課題

授業をすすめるとき、ふつう、その流れを3つの段階に区分して考える。すなわち準備過程、中心過程、確認過程である。そしてそれぞれの過程において、学習課題を設定する。もちろん、学習課題は、各過程において、1つの場合もあるが、2つ以上の場合もある。

課題は、指導目標と、子どもの学習活動の間であって、子どもの思考、問題解決のはたらきや、知識、技能の定着をうながすもの、つまり、仕事の内容を指示するものであるから、いきなり課題を与えても課題解決へのとりくみが円滑にはこばないことが多い。

また、相互活動によって、課題が解決されたあと、それを教師が補足、修正し、最終的なおさえをしなければ、より確かな指導をしたことにはならない。

これらのことを考えていくと、課題そのものがよく吟味されたものであつたとしても授業の中で、その機能を充分、発揮するとはかぎらないことに気づく。

わたしたちは、課題が、よい課題として授業の中で生かされるためには、その前後に行なわれる教師の指導が、非常に重要な意味をもっていると考え、これを大事にしてきた。

ことに課題前の指導における動機づけは課題にとりくむ子どもの姿勢を大きく左右することが今までの実践からも、うらづけられている。

課題前の指導の役割として考えられることに、

ア、問題意識をもたせる。

イ、興味関心をよびおこさせる。

ウ、手がかりをつかませる。

エ、予備知識を与える。

などがあげられる。

課題前の指導、課題提示、相互活動、課題後の指導、評価という一連のステップをより意識的にふんで授業をすすめるために指導案の形式を次のようにしたこともある。

5年 社会科
単元 日本の農業の特色と問題 ($\frac{14}{15}$)

課程	学習活動と指導上の留意点	評価
事前	<ul style="list-style-type: none"> ○ p86 のグラフを見ながら、自作農、小作農のちがいでついて指導する。 ・知っている児童があれば発表させる。 	
中導	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1941~1970年のグラフであるが終戦は1945年であることを、おさえておく。 	
課題提示	<p>p86の自作、小作の移りかわりのグラフを見て、気づいたことをできるだけたくさん発表しなさい。</p>	
相互活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 順番で1分間話し合う。 ・戦前、戦後の自作農家の割合 ・戦前から戦後にかけたの自作、小作の移り変わり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで話し合いに参加しているか。(反応器)
発表	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指名し発表させる。 ・手を上げていない児童にも意図的にあてる。 ・つとめてつまづきをとりあげるようにする。 	
事後	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現在の農家の姿も80年前までは、大部分が小作農であったことをおさえ、どうしてそう変わったのかを意識させる。 ○ 戦前の地主と小作の関係を説明する。 ・とれ高のおよそ半分を地主におさめる。 ・機械の利用や化学肥料もなかったので農作業も苦勞が多かった。など ○ ここまでの学習事項をノートする。 ・板書の空らんをうめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦前、戦後の、自作、小作の移りかわりのようすをつかむことができた。
指導	<p>(ノートの確認 隣接法)</p>	

(3) よりよい課題を求めて

課題に対する取り組みが活発であるか否かは、課題前の指導が大きな意味をもっているわけだが、まず課題そのものの適否が当然問われなくてはいけない。

よい課題の条件として 次のようなもの

が考えられる。

- ・学習目標を達成するためのもの。
 - ・単元や題材の中での位置づけが明確なもの
 - ・高度な段階への発展性のあるもの
 - ・思考が深まるもの。
- また、児童の関心を高め、思考が促進されやすい課題であるためには
- ・適当な複雑さや不明確さを含んだものであること。
 - ・興味を喚起できるものであること。
 - ・子どもがとりつきやすいものであること。
 - ・がざられた時間の中で、まとめられるものであること。
 - ・まず教師にできるものであること。
 - ・語尾は指示する形(命令形)であること。
- などの条件が必要であろう。

一方、実際の授業の中で、どういう課題が、どんな形でなげかけられたとき、子どもたちが活発にとり組んだか、例を示す。

- ・確認的(復習的)なもの
- ・身近な経験、生活に密着したもの。
- ・まちがいを見つけさせるようなもの。
- ・行動をとらなうようなもの。
- ・比較するようなもの。
- ・子どもが興味をひくもの
- ・フィードバックした後のもの

いうまでもないことであるが、具体的に何をやるのかがよくわかることが課題提示のし方としての必要最低条件である。

5年 算数
単元 円と多角形 ($\frac{5}{10}$)

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
準備	<ul style="list-style-type: none"> ○ 六角形を見て辺の数、頂点の数はいくつかプリントにかく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ TPを示す ○ 六角形すべてに共通な数であることをおさえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 辺の数、頂点の数はわかったか。(挙手)
経過	<ul style="list-style-type: none"> ○ 六角形Aは、他の六角形とどんな点が違いかみつけなさい。 ○ いろいろな六角形を見て、違う点について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 直観的に、Aの六角形は、等辺等角であることを気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 違いは、わかったか。(隣接法、挙手)

程	○話し合う。 ○発表する。 ④		
中 心 過 程	○本時の目標を理解する。	○目標についての説明をする。	○目標はわかったか。(隣接法)
	p 60の六角形の作り方を見て、Aを作りなさい。		
	○作り方を理解する。 ○指示に従い、六角形Aを作る。	○アルファベット「D, E, F, G」の読み方を指導する。 ⑧ ○作り方の重点を色画用紙を使っておさえる。	○作り方はわかったか。(挙手) ○折り方、切り方は正しいか。(隣接法、机間巡視)
	六角形Aの特徴を調べ、まとめなさい。		
程	○p 60 ①の問題の意味を理解する。	○要点を板書する。 ○TPで調べる辺を確認させる。	○正六角形の特徴が理解できたか。(ノート、指名)

課題が具体的で、指示内容が明確であり、児童のとり組みは活発であった。3つ目の課題は「六角形Aの特徴は何か、ノートに書きなさい。」とした方がより適切であった。

1年 理科

単元 あさがおのはなとみ($\frac{1}{10}$)

授業中の子どもの反応から、課題を修正して与えたり、予定外の課題を新たに設ける必要の出る場合がある。

あさがおにている花には、どんな花があるでしょうか、考えなさい。

この課題の場合、表現の中で「にている」という言葉に具体性がなく、花の形の仲間分けという教師のねらいが十分に果せなかった。次のような課題を追加して出したところ、話し合いも活発におこなわれた。

あさがおの花と、チューリップの花は、どんなところがちがいますか、考えなさい。

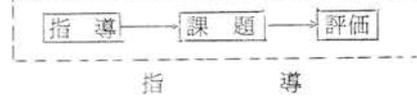
(4) 指導と課題と評価

1時間の学習内容は、ふつう、いくつか

の区分に分けることができる。わたしたちはその区分ごとに子どもたちの理解をおさえ、確かめながら授業をすすめている。この確かめが評価なのだが、学習過程におけるこの評価(即時評価)を、より確かな学習を進めるための指導の手がかりとして生かすように必がけている。

今、授業の中でおこなわれる、指導、課題提示、即時評価の3者の関係を考えてみる。

教師の指導のあとに課題の提示があり、課題解決のあとには必ず評価がなされるべきであるし、また課題なくして評価はあり得ない、といっても過言ではないだろう。



指導、課題、評価は授業の流れの中で、上図のような位置関係にあるといえるが、実際には、この3つ全部を含めたものが指導であるというふうにとらえたい。

(5) 評価の実際

評価については、即時評価の方法、場所適否、とりあげ方などについて昨年度の研究を積み上げるなかで、次のような仮説をたてた。

- ・子どもたちの理解度を的確にとらえることができる。
- ・努力成果をみることができる。
- ・到達度をはかることができる。
- ・今後への励みと努力点を知らせることができる。
- ・確かめができる。
- ・学習のまとめができる。
- ・指導の反省ができる

ア、評価として考えられること。

学習活動が存在する以上、評価は、どこでも存在する。いささか拡大すれば、次のようなものも評価として考えられるだろう。

- ・確かめ(是非の区別)

- ・まとめ
- ・反省
- ・はげまし

イ、評価のしかた

学習課程における評価のしかたとしては、いろいろな方法が考えられるが、ふつう次のような方法を単独に、または、組み合わせて用いている。

- ・バズをさせる
- ・挙手させる
- ・指名し発表させる
- ・机間巡視して指摘する
- ・評価表に記入させる
- ・評価テストを行なう
- ・プリントに書かせる
- ・ノートさせる
- ・動作をさせる
- ・読ませる

これらは、対教師、児童相互、児童自身のいずれかにおいてなされるが、最終的には原則として教師側の対児童評価でしめくられる。

ウ、評価する上での留意点

- ・常に評価を目標との関係でとらえていくこと
- ・認知、態度両面から評価していくこと
- ・広義にとらえて、話し合い活動は、すべて評価活動であることを意にとめていくこと
- ・児童の自己評価は、あいまいにならぬよう評価基準を教師がしっかり示すこと

エ、評価表のねらい

評価表の項目は学習目標を具体化したものである。だから、子どもにとってもわかりやすく自己評価がしやすい。

また、評価表を使うことによって

- ・目標をわかりやすくさせる
- ・学習内容をはっきりさせることができる。それによって
- ・学習活動を主体的にすることができる

評価表を使う上で注意することは

- ・評価項目は簡潔にすること
 - ・長つづきさせるためには評価表をきばりすぎないこと
 - ・なぜ評価表をつけるのか、というねらいを子どもたちにもはっきりさせていくこと
- である。

オ 評価の実践例

(ア) 自己評価表

学習内容をよりの確につかみ、学習結果をチェックするために、ある教科では自己評価表を使っている。

◎ 算数科の例（高学年）

目 標	自己評価
1 倍数・約数の意味を覚える。	A
2 倍数・約数をみつける。	A
0 元気よく発表する。	B

始業と同時に上図のような表をノートに書き、授業終了直前に、目標の達成度をA・B・Cで自己評価する。

A・・・できた

B・・・ややできた

C・・・できなかった

また、態度目標を必ず入れるようにしている。

教師にとっても児童にとっても簡単な方法なので表を書いたり、評価したりするのに時間がかからず、長つづきしている。児童の意識調査をしたところ

- ・目標があった方が、きょうやるのがよくわかる。
 - ・なにをやったのかわからない、ということがなくなってきた。
- などの声が多かった。

(イ) 確認テスト

授業終了前に、本時の目標到達度を

テストによって評価するものである。短時間にできるものでなくてはいけない。

社会科の例（高学年）

瀬戸内地方の農業 p51	1	この地方の耕地の特色はどんなか	
	2	耕地を広めるために、どんなことをしてきたか	
	0	理由をつけて発表できたか	(○・△・×)

短ざく形の紙にプリントし、評価後は各自のノートに貼っている。

(ウ) 生活反省表

授業中の評価とは直接関係ないが、帰りの短学活などで利用するものである。

低学年の例

②はん がんぱりひょう (😊😊)

が	に	わ	よ	は	は	じ	き	か	き
つ	ち	す	う	っ	あ	ん	し	し	か
		れ	ぐ	び	な	う	よ	り	や
		の	ん	う	い	べ	う	ご	う
		の	の	び	し	う	く	の	の
		お	び	う	い	べ	く	の	お
9	2	×	○	×	○	○			😊
9	8	○	○	○	○	×			😊
9	6	○	○	○	×	×	○	○	

班ごとに話し合って記入させている。○×の基準が班によってちがう、ということや、マンネリ化しやすいなどの問題点はあるが、時々形式を変えることによって新鮮さをもたせるように工夫している。

1日の学校生活の成果を自分自身が知り、次の日の生活に意欲をもたせるために作った。

4. 実践をふりかえって

研究途上のことでもあり、まとまりらし

いこともついていないのが現状である。しかし、実践してきて、教師側にも、児童の側にも少しずつではあるけれど、いろいろな面での成果があがってきていることは確かである。

(1) 教師側として

- ・課題を追求していくことにより、より意識的に授業のくみたてを考える姿勢がでてきた。
- ・それに関連して、教材や、内容の精選がすすめられるようになった。
- ・即時評価をすることにより、児童の考えや理解度が確かめられ、次の課題や活動が明確に指示できるようになった。
- ・学習活動の精選にも目を向けることができるようになった。

(2) 児童側として

- ・反応器によって、おりめきりめがしっかりつくようになった。
- ・先生の指示や自己評価表等によって学習する内容が事前によくわかるようになった。
- ・評価活動をすることにより、わかったかわからないかを確かめながら進むので、自分のつまづきや誤まりがよくわかり、復習がしやすくなった。
- ・そのために、興味や関心が高まり、進んで学習に参加できるようになった。

5. おわりに

課題と評価についての実践的な研究をすめてきたが、まだまだ、その途上であり、ほんの断片にすぎない。これまで実践してきたことを、さらに深める意味で、次の課題にも目をむけていきたい。

- ・目標、課題、評価の関連を追求すること。
- ・課題に対して、児童ひとりひとりが、どのように反応し、どう思考が深められていくかを、きめ細かにとらえていくこと。
- ・いろいろな評価活動の方法を、実践の中からもっとみつけていくこと。

第11回全国バズ学習研究集会

自己指導・自己実現をめざす生徒の育成 ひとりひとりのよりよい変容を求めて

愛知県春日井市立藤山台中学校

1. はじめに

本年度は、昨年までの研究成果をふまえ、バズ学習を基盤として学習指導の実践研究を推進する中で、生徒ひとりひとりが、自己指導・自己実現をめざし、よりよい変容を促すことに努めている。

- ① それぞれの教科の立場から、学習過程の中で、ひとりひとりの生徒をとらえながら、それぞれに応じてよりよい変容をしていくような授業構造への追求。
- ② 学級経営において、ひとりひとりに目的意識をもたせ、積極的に参加することによってより望ましい学級集団をめざす。
- ③ クラブ活動を通して、ひとりひとりが自己をみつめ、自己をみがくことによって、自己をより高めていくようにする。

それらが本年度の重点目標であるが、それへのアプローチは、あらゆる場における追求であり、また、多角的に深くとらえることを意図している。

2. 変容を求めて

生徒ひとりひとりによりよい変容をひき起こすには、生徒の全体像をとらえることが前提である。まず、その初期の段階においては、発言、メモなどによる外的なとらえを中心に観察している。つづいて追求の姿勢、考え方の特色など内的なとらえがこれに加わる。また基本的事項の理解度は、生徒のとらえにあたって、常時参考にすることが重要である。

このようにしてとらえたひとりひとりに対して、どのようなアドバイスをしていくか、それによって、どのように変容しているかをとらえていかな

ければならない。このようなサイクルを反復することによって、より確かなひとりひとりの成長をみつめていくことができよう。

3. 実践の中から

(1) 外的とらえ～発言と記録から



自主発言は男子が多い。リーダーシップをとるのは、1. 13. 14. 17であり、単発的なのは8. 9. 15. 18. まとめで出るのは、2. 16.であることが多い。

⑦は、メモはいつもきちんと書けるが、発言にはむらがある。⑩に多い女子は指名すれば、内容の豊かな発言ができる。

基本的理解の低い10人はいずれも発言の少ない類型に入っていることは注意を要する。とくに8の指名の機会には留意している。

(2) 内的とらえ～問題追求の姿勢・

考え方の特色 [～～傾向弱]

ア. 感覚派…直感的にひらめいたものから追求を始め、自分を裸にしてつくるところが少ない。4. 12. ① ⑨ ⑪ ⑬ ⑰ ⑲

イ. 現実派…問題状況に応じて、具体例に即して考えるが、是々非々である。

1. 5. 8. 9. 14. 15. 17. 18. ②. ③. ④. ⑥. ⑧. ⑩. ⑭. ⑮. ⑯. ⑰. ⑲.

ウ. 理論派…理づめで考えをすすめるが、自己の内面まで動かすことが少ない。

2. 3. 6. ⑦. 10. 11. 13. 16. ⑤. ⑫. ⑬. ⑱.

どのタイプの生徒がよいというのではなく、それぞれのタイプに長所と短所がある。各タイプの特性を生かしながら成長する手だてを打つことが必要である。

(3) K男のとらえと手だて～観察メモより

⁵/₁₂ 単元テストの時、合掌して祈りをこめてから問題を始める。(テストにこだわる子?)

⁵/₁₈ 第2次世界大戦の原因のレポーターに指名はきはきした説明、TPの図も色をうまく使ってわかり易い。(なかなかやれるな)

⁶/₇ 授業に行くと、席でマンガを読んでいる。取り上げて、放課に注意して返す。

⁶/₂₄ 3限 教科書開かず、私言、学習意欲見られず。読み指名、ハイスピードで読む。要点聞く。行数で答える。T要約していえ。K無言、T どうしてこんな質問しているかわかるか。Kわかりません。T理由説明 Kすみません。T簡単にあやまるな。(6月に入ってやる気がうかがえない。バズも消極的、ノートするのみ)

⁶/₂₅ 1限 玄関で会う。K「昨日はすみません」T「わかった。がんばれ」

⁷/₈ 慎重にやっている。カットの絵がうまい。(学習にむらがある。理論的思考よい)

⁷/₁₅ 各教科のコメント 国語 — 学習態度が確立してきた。40TOP. 数学 — よく発言し積極的だが、落ち着きがない。もっと他と協力を。理科 — 予復習して理科的なものの見方を養なおう。美術 — 落ち着きがほしい。美術 — 落ち着きがほしい。技術 — 発表力はよいが雑談が目立つ。英語 — よく努力した。質問もよし、もう

少しだ。

⁹/₈ 「節約はよいことか」の予想で下枠内文を書く。少数派で論旨に飛躍はあるがKをみがくには絶好の場と考え授業の中心にすえた。

節約はしなくてもいいと思う。皆は将来の事を考え、乱雑に資源を使うなどいっているが、結局、大切にしてもばっばつと使っても限りのあるものは限りがあるのだ。いつかはなくなる。早いか遅いかだけだ。それより今のことを考えよう。終戦以来成長を重ねていた経済を「節約」といってストップさせたら大混乱が起こる。作っても売れず、倒産、失業が増えると思う。そんなこととして自滅するより、太く短く生きる方がよい。〈以下略〉

⁹/₁₀ 1. 14. ⑮が反論した。13. 17がK側で応戦結果は大混乱はオーバーだとして混乱と訂正した以外は自己の主張を通し続けた。

(鋭い対立では変容しないか?)

⁹/₃₀ 太平洋戦争Kのメモに「人間は利己的のわがままで、偏見と差別をもち、自分の利益を守るためには相手を悪く言おうが、殺そうが自分のすることはみんな正しいのだ、というようなものに思えてきた。」この考えを動かしたい。

(4) N君のメモより

⁹/₁₃ 漢字を練習しはじめて5日目。だんだんむずかしくなる。少し複雑になるともう自信がない。

⁹/₁₆ 自分では気をつけているのだがすぐ字がザツになってしまう。これからは一字一字へたでもよいからしっかりかこうと思う。

⁹/₁₈ 前回でまちがえたのは、なんとか書けるようになった。

⁹/₂₁ 漢字を覚えるためには、書くことが必要であると痛感した。

⁹/₂₄ やはり漢字は意味がわかっていてこそ書けるのだと思った。

⁹/₂₆ 画数の多い漢字には、自信がなかった。

9/30 漢字には同音異義語があるので、じゅうぶん気をつけよう。

10/2 よくなかった。自分では書けると思っていたが、実際はそうではなかった。

10/8 自分では60%のできだと思ふ。自分の力ではこれくらいだと思ふ。

10/8 たくさんやることがあり、あせってしまった。 etc.

(5) M子の記録
 <M子の記録>

- 明るい声、大きな字、あわててミスが多い。
- 聞く態度は良いが、授業中の笑い声が気になる。
- 統率力あり。
- 関係的思考が不十分である。
- おしゃべりが多い。



<M子の考え>

- 自分は級長だが、このクラスを良くするにはどうしたらいいか。
- 自分はクラスの仲間から慕われているだろうか。
- 少なくとも、まず自分だけはあいさつをし、そうじもだれにも負けずに一生懸命やろう。



<M子の思い>

- 自分は級友から慕われていないのではないか。
- 自分は級長には不向きでは……。

(6) K子のカルテ

○生年月日 S 37・2・10
 ○家庭環境 父 大学卒 会社員
 母 高女卒

兄 大学生

○住所 高森台団地

○欠席状況

月	4	5	6	7	8	9
日数	2	7	0	0	1	0

○学力 下

○1学期末各教科アドバイス

国 基礎学力に力を入れたい。
話し合いに参加したい。

社 友人との対話ができない。

数 よく質問する。授業中もよくやる。友人に聞く。

英 時間をかければできる。

○友人 3D・Sさん。表情は明るい
が、一部の女子や授業中指名されると、やっと聞こえる程度の声で発言する。班日記などには自己主張、意見交換ができる。家庭に於ては、消極的で特に実習は不得意である。

(以下略)

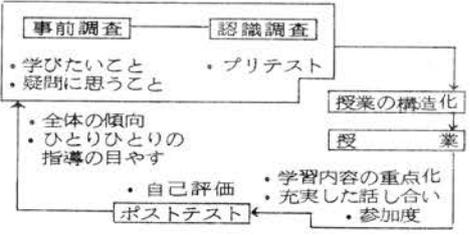
(7) 生きた授業を求めて

生きた授業を望むのは教師も生徒も同じである。それには、教師の生徒の実態をふまえた授業構造が必要である。

ア. 指導上の留意点として

- ① ひとりひとりの生徒の変容をもとめるためには、まず全体の傾向(生徒の実態・認識)をつかむ必要があること。
- ② 生徒が学びたい、知りたい(行動的目標)と思うことを重点化の柱として学習内容を整理すること。
- ③ 重点化されるべき学習内容については十分な時間をとり、探究の過程、話し合いの過程をふませること。

イ. 学習の展開にあたって



ウ. 生徒の実態と授業の組み立て

単元; 生きている生物の活動

(事前調査・抜)

問1. 生きているということはどんなこととわかりますか。

- 成長している
- 仲間をふやす
- 心臓や脈が動いている
- 呼吸している
- 細胞が動いている
- 栄養分をとる
- 意志がある 等

学習する
(話し合い)

- 1次 細胞の活動をしらべよう
- 2次 呼吸についてしらべよう
- 3次 栄養分になる物質をしらべよう
- 4次 動物の体の動きをしらべよう
- 5次 植物の体の動きをしらべよう

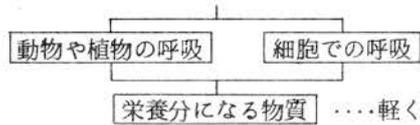
(全体の傾向の把握) ... 認識調査(抜)

問 呼吸について正しい文を選べ。

- ア. 植物はCO₂を出す動物はO₂を吸収してCO₂を出す (27人)
- イ. 植物は昼間は光合成をし夜間呼吸をする (17人)
- ウ. 植物も動物も昼夜を問わず常に呼吸している (35人)
- エ. 植物が呼吸するということは光合成することである (10人)
- オ. 生活に必要なエネルギーは呼吸活動でとり出される (7人)
- カ. 呼吸でとり入れられたO₂は栄養分の分解につかわれる (26人)

※ア. イ. エは誤答
重点を置いた授業の構成

★細胞での活動
(7時間)



こうした授業の構造の中で、D子の行動に焦点をあてて追ったが、ひとりひとりの生徒が、ほんとうに理科に親しみ、主体的な学習ができるようにさせるまでには、さらに微細な分析と把握が必要であろうし、何よりも自己理解し、努力するだけの目標を持たせることが大切であろう。そのためには、生徒ひとりひとりの疑問や発想をほりおこし、それを授業に組み入れていくことがポイントになる。そういう意味で実態をつかみ、授業を構造化し、重点化を意図した授業展開の必要性を痛感したわけである。

(8) 学習とりくみ表

この表は、生徒の授業前の準備状態から授業中の態度、忘れ物の有無、グループ活動における参加度などが、把握できるようになっており、全体として学習意欲の程度も、つかめることができる。(表省略)

グループ活動が、効果的に行われている班の反省を見ると、

「だいたいわすれものもなく、1人1回発言してバズが有効にできた。班長にも協力してくれてよかった。」 (2B5班)

ということが、上げられている。これに対しグループ活動が、うまくいっていない班には、問題生徒が必ずおり、グループ全体に悪い影響を与えている。5月後半から6月中旬までの調査で、浮かび上がった問題生徒に対しては、個人面接による指導をした。

(9) 到達度認定カード

計算力不足をおぎなうために、個人別に次のようなカードを提示して、苦手な分野の計算練習をさせている。

到達度認定カード

第1ステップ	小数の計算	加	減	○
		乗	除	×
第2ステップ	分数の加減	同分母	○	
		異分母	×	

第3ステップ	分数の乗除	約分有	×
		約分無	○
第4ステップ	正負の加減		
第9ステップ	方程式	一元一次	○
		連立	×

(10) 学力診断プロフィール

授業開始のチャイムと同時に、学習委員の指示により、計算テスト開始。3～5分後、自己評価、結果をプロフィールに記入する。

プロフィール (3C K-1)

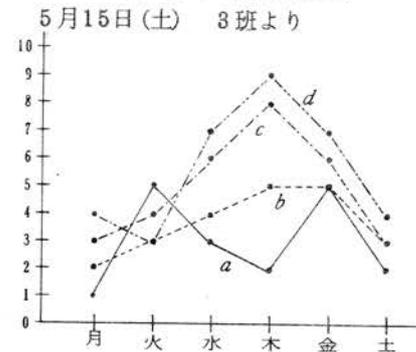
回数	月日	テスト	得点	プロフィール					復習問題	確認
				A 90%	B 89~70	C 69~50	D 49~30	E 29~		
5	4/26	分数の乗法・除法	6/12						③, ④, ⑧, ⑨ /	○
6	4/27	"	9/12						① /	○
9	5/4	最小公倍数	7/11						④, ⑦, ⑩, ⑪ /	○
10	5/8	"	11/11						/	○
13	5/12	2進法の計算	3/11						/ 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 11, / 3	○
14	5/14	"	10/11						/	○

○印 計算まちがひ
無印 理解不十分

(11) バズノートをくふうして

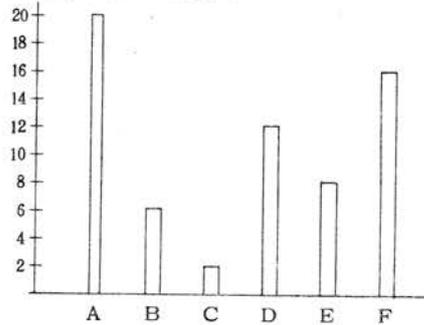
その日の活動状況を記録するのにもいろいろ方法があるだろう。ここに試みているのは各教科ごとの班内および、全体での発言回数と生活の反省を書き加えることにし、発言回数は毎週末に級長が集計して表にあらわすことにした。

(一週間の発表回数表)



b君はだんだんよくなりました。そのままで。aさんは変化が激しいですね。班内の話し合いは活発になってきました。さらに活発になるようにがんばろう。

5月15日 6班より



今週は話し合いは活発にできたがbさん、c君ももっとがんばろう。a君が一番でした。

(12) 係活動を通して

— 1Bの例 —

係の立候補制になってから、クラスのためにやってやろうという意欲のもりあがりを見た。帰りの短学活における、学習計画・ポイント整理とも、順を追って積極的にとりくめるようになったのは、そのあらわれである。

— 1Gの例 —

学級でどんな係が必要か話し合わせ、各係の分担を決めた。そして、学級の係活動の内

容を明確にした。班活動であるために、さぼっているとつきあげられる。自分たちで必要に応じて、各係の班会議を開いている。

(13) バズの基本を定着するために

バズ学習の約束の習慣化を図るために、短学活を利用して、そのプログラム化をした。

1Cは、1学期間をそれに充当し、徹底的に反復させた。現在では、非常によく定着している。

1Dもその効果があらわれている。それはT君の性格が、自己中心的な思考→客観的→素直→落ち着きを見せ始めているからである。

(14) 健康カード

ひとりひとりの健康保持増進のために健康カードを作成、健康状態を裏面に記録し個別指導できるようにしている。(以下略)

(15) 個を生かしたクラブ活動

本校には15のクラブがある。それぞれに練習の内容についての差異はあるが、方法については、統一した形をとっている。

次に示すのは、女子バレー部の例である。

ア. 組織

主将1 副主将2 マネージャー1 学年代表 各2 部員 1年生18名、2年生23名、3年生14名、計55名。

学年をはっきりさせることと、タテのつながりを重視することとして上級生が下級生を指導している。

3年生→2年生 2年生→1年生

上記2つの組み合わせにより、つねに1対1、あるいは1対2の形式をくずさないで効果的な指導をさせている。

例 モギ(3年)→ミサ(2年)

カゴ(2年)→ヒロ(1年)

このことによって指導者と被指導者が決められているのでキャプテンの指示にしたがって全員がすみやかに行動でき目的を達成できる。この練習を通していえることは教える立場と教えられる立場ははっきりしており、つねに相手の立場にたって物を考えることができる。また指導することのむずかしさを全員が体験し、それを通して自己を律しやがてはその経験を通して自己を

高めることにおおいにプラスになると思う。

「教えることは教えられること」の意味をしっかりとわきまえて活動することによって自己の欠点をも再発見することになるであろう。

クラブ活動でやしなわれるタテの系列がしっかりときずかれたとき、そこにはほんとうのよき先輩、よき後輩が生まれ、より活発な活動が展開されよりよい伝統がつけられるであろう。

イ. 練習内容及び練習時間例(バレーコート)

すべての活動に目標と開始時間と終了時間が定められている。これらを達成するために最大の努力を払わしている。

目標例・フットワークは腰を低くしてやる。

・時間を効果的に使って練習の効率をあげよう。

・行動はすばやくきびきびとしよう。

上記の目標は一日一日決められているが目標を達成するために練習の開始時間が3時30分であることの共通理解。このことがクラブ活動をより活発にすることと、効果をあげることと、時間を守らせることの大きな要素となっている。

3:30~3:45 ランニング(運動場3周)

体操・サーキット

3:45~4:00 1年生の指導(2年生)

4:00~4:15 2年生の指導(3年生)

1年生ランニング

4:15~4:30 グループレシーブ(3年生)

1年生実技見学

4:30~4:45 サーブ(相手をきめて打つ)

1年生ランニング

4:45~5:00 1年生の指導(3年生)

2年生ランニング

5:00~5:15 整理運動・反省と明日の計画

ウ. 試みの中から

・クラブノートによる指導

・クラブ活動日誌の記録によるもの

・新聞「球友」の発行によって

・奉仕活動を通して

ひとりひとりの変容を求めて技術的な面

もさることながら、あらゆる場でそれを試みてみた。次にその例をあげてみよう。

<F子の場合>

1年生の当時は自己中心的でかなり批判的であった。2年生になって自らマネージャーという任を引き受けた。それ以後、部内の中心的な存在となり、キャプテンとつねに部内で生じた問題を直接解決することによって、多くの部員から信頼を受けるようになった。

現在では部員相互の立場の理解ができ、ものの考え方、性格も変わり、的確な発言ができるようになり、クラブ活動の運営に大きな影響を与えている。

<M子の場合>

1年生入学当時、不器用で消極的で性格に暗さが見られパスすらできなかった。ところが、上級生の指導とチームメートの励ましのことばと自らの努力で、自己の能力を高めてきた。現在では性格も明るく、技術的な面でも後輩を指導することができる段階までになり、人を指導することのむずかしさと楽しさを経験している。

<K子の場合>

集団生活がどうも苦手だという生徒であった。だが、クラブノートに自分の考えを書いたり、また人の書いたものを参考にすることによって、自分のかかえている技術的な悩みや精神的な悩みを解決する糸口を見つけた。

以後、ノートを通して多くの仲間から意見を聞くことによって、自己の向上につとめている。

エ. 発展をめざして

さまざまな問題をかかえているクラブ活動を、今後より発展させるためには、教師中心でなく、子どもたちの自主性の中から積極的な活動が生まれる。指導者はそのためのルールをしいてやることは忘れてはならない。クラブ活動が人間づくりの場であると同時に、もうひとつの教室として、学級で指導することのできないことのためにも……………。

4. おわりに

これまでの経緯を省みると、そのとらえ方は多面的であったようだが、そこには、各自の発想からにじみ出たよりよいアイデアが活かされているように思われる。

深まりという段階にいたるまでには、まだまだ時間を必要とするが、ひとりひとりととらえ、よりよい変容をさせるためには、どこに焦点化したらよいのかを見きわめる手がかりを得たように思う。

生徒ひとりひとりも、それに媒介され、徐々に仮説を実証しようとしている。そのきざしを契機として、今後さらに飛躍したい。

第11回全国バズ学習研究習会

ひとりひとりを生かす教育実践 —— 学級生活における評価活動をとおして ——

愛知県春日井市立東部中学校

1. はじめに

バズ学習は、生徒が自主的、意欲的に学習に参加し活動することによって、個人思考や集団思考を、それぞれの場面で効果的に行ない、学力と人間関係・個人的学習と集団的学習・個人の発達と集団の成長など、教育の統合化をめざしたものである。

本校における全校的研究体制も、短学活の指導にはじまり、班編成、話し合いの方法、技術など、基礎的な研究の積みあげの時期。研究対象が教科指導の場へ移され、課題の重要性に気づき、「よい課題」とはどんなものか、課題の提示はどのようにすればよいのか等、研究をすすめた時期。昨年に至っては、課題や課題提示の方法のみを追求していても課題に対する評価が適確になされなければ、「よい課題」は生きてこないことに気づいた。つまり、課題と評価は表裏一体のものであるという見地から、教科の学習指導における評価活動を重点的にとりあげたのである。

私たちの研究もかなりの深まりをもってきたが、昨年度の反省から次の様な問題点に出合った。それは、ここ数年来4月における教職員定期異動の規模が大きいことから、共通理解の深まりが困難となったこと、それに加えて、研究の方向が教科における課題と評価に絞られたことから、授業のみに目が向けられ、学級経営と学習指導がきり離され勝ちとなった。その為、バズ学習体制への総点検の必要を感じた。

全校的研究体制を確立するためには、全教職員の共通理解が大切である。本年度は、すべての教師がお互いに初心にかえり、「よい授業はすぐれた学級経営から」をあい言葉として研究をすすめることにした。

学級経営はよい授業の土台である。班での活動をとおしてきびしさと楽しさがあり、ひとりひとりを生かすことができる学級経営こそ、教育の今日的課題であろう。このように重要な学級経営に、全教師丸一となってとり組み、学習効果をあげることを考えた。更に1日のうち学級担任として生徒に接し、学校生活における基本的な指導が多くできる場は短学活である。その意味で学級経営の場を短学活に求め、その充実をはかった。

私たちは短学活での評価活動をすすめることによって、次のような成果のあがることを期待した。

- 学習への意欲を高めるであろう。
- 望ましい生活習慣や態度を養うことができるであろう。
- 生き生きとした学級生活ができるであろう。

短学活の充実からよりよい学級経営へ、更に、教科指導の場へと一貫した指導をすすめることにより、ひとりひとりの向上をはかり、その方途をバズ学習に求めることは、ひいては生徒ひとりひとりの血となり肉となることと確信している。

2. 短学活の運営と強化

(1) ねらい

昨年度は主として学習活動における認知面の評価活動を各教科ごとに実践し、生徒の参加度、意欲化という面である程度の成果を得た。そのなかで、学習の場を生みだす学級経営面も重視し、学級生活に必要な基本的な活動事項を評価していかねば、認知と態度の両目標の同時達成というねらいが困難であることを痛感した。

さらに、この研究の反省で、特に、バズ学習体制への総点検の必要性をお互いが認識し、今年度はその第一歩として、学級経営の充実、その目的を達成するために、学級生活のいろいろな活動に対して、指導評価の場をつくり、その場を短学活に求めるなかで、体制の立て直しをはかった。

本校での、短学活は、朝20分、帰り25分合わせて45分、一日の学校生活の中に位置づけられている。その運営と指導については、各学級で手びきなどを利用し、生徒の自主的な活動を主として展開されている。

この短学活を、学級経営の充実化といった面で問い直し、さらに、学級活動についての評価点検といった二つの面で、研究にとりくんだ。

このとりくみでは、まず、短学活そのものの内容充実をめざし、いろいろな評価活動をとおして、学級学習活動を点検していき、バズ学習に必要な基本事項も評価項目のなかにもりこんで、生徒に意欲を持たせた。また、学級生活に必要な態度や習慣を身につけさせ、ひとりひとりが生き生きと活動していくような学級づくりをめざした。

まず、短学活の充実をめざして、内容を次のようにとらえた。

- ① 学級生活の向上
 - イ. 学級生活の出発点まとめの場
 - ロ. 生徒同志の相互活動の場
 - ハ. 担任と生徒との人間的なつながりの場（個人指導の場）
- ② 学習活動の拡充
 - イ. バズ活動の訓練と定着の場

- ロ. 教科学習の再認識の場
- ハ. 家庭学習を充実させる場

③ 評価・点検

- イ. 話し合いの場
- ロ. 班日記活用の場
- ハ. 評価表で点検の場
- ニ. 係り活動の場

以上のようなそれぞれの場をふまえて、各学級でとりくみ、短学活と学級生活の充実をねらった。

(2) 留意点

短学活の充実をめざし、いろいろな活動が試みられた。

まず、形式面の確立をめざし、手びきを活用したり、各学年で短学活の公開を実施し、次のような指導をふまえてねらいにせまった。

- ① バズ学習の必要性
- ② 短学活について
- ③ 班編成について
 - イ. 班とは
 - ロ. 編成の方法
 - ハ. 班長とは
- ④ 話し合いのしかた
 - イ. 効果的な進めかた
 - ロ. 話し合いの形式
 - ハ. 発言のしかた
- ⑤ 班日記について
 - イ. 書くねらい
 - ロ. 書き方
- ⑥ 学級活動の評価について
 - イ. ねらい
 - ロ. 方法について
 - ハ. 事後指導について

さらに学習活動に必要なきまりについてもその都度指摘するなかで意識化をはかり学級生活の中に定着することをねらった。

また活動内容も次のように次第に確立されてきた。

- ① 朝の短学活
 - イ. 健康観察をしあい励ましあわせる。
 - ロ. 一日の生活目標を立てさせ、意欲を持たせる。
 - ハ. 家庭学習の確認、今日の授業への見

通しを立てさせる。

- 二. 忘れ物の点検、授業への準備をさせたりする。

② 帰りの短学活

- イ. 一日の学級生活の活動について評価しあうなかで明日の生活への手がかりとさせる。
- ロ. 疑問解決をとおして、ひとりひとりが、確かな学力を身につけさせる。
- ハ. 家庭学習の内容や方法について考えさせる。
- ニ. 係および担任からの連絡で、明日への準備を明確にさせる。

このようなパターンをもって各学級で短学活が運営されていき、さらに、内容の充実、定着をめざして、各活動場面の展開について細かな点にも留意し、いろいろな方法が実践されていった。

たとえば、疑問解決を定着させ、思考活動を充実させていくために、短学活ノートを各自に持たせ、それに記録させていき、背面黑板の内容を充実させて、疑問解決や、家庭学習の計画などの活動についての円滑化をはかった。

教師も、第6時限終了と同時に教室へいき、学級全体の動きに留意しながら、班の中へ順次参加し適切な指導助言を加え、しめくりとしての評価をして、生徒と共に歩みながら短学活の充実をめざしてきた。

さらに今年度のとりくみのなかで、短学活の場で学級活動の評価を次のように実践した。

- ① 学級活動の評価
- ② 班活動の評価
- ③ 短学活の評価

これらの評価の実践は教師側からの評価を加えながら、評価表、班日記、係り活動など、相互活動のなかで試みられ、実践を積み重ねてきた。

短学活で、学級活動についての評価をとおしていくことにより、規律ある学級ができてきた。また、短学活そのものも定着し、充実しつつある。

生徒ひとりひとりの活動、班、学級の活

動にも、もりあがりを見せてきている。

(3) 指導と評価

我々は、評価のねらいを次のようにおさえて指導してきた。

- 評価活動によって、目標への到達の程度が把握でき、次への目標が明確にされる。
- 生徒相互の交流によって、自己の学習の確かめや、つまづきの克服等、自己調整ができ、あわせて人間関係を高める。
- 個人・班・学級の成長を促すために個人の問題を班に、班の問題を学級全体に広げることにより、学級の和を深める。
- 実践例として、次のようなことがあげられる。
- ア. 学級生活の向上

クラス全体の空気がざわつききみで、誰も注意しあうことのない、なれあいのムードが見られたので、担任が短学活の時間に次のような投げかけをした。

「注意することのプラス」

〈注意する側〉 〈された側〉

- 人の目が厳しくなる。 • あやまちを認める。
- 自分自身の、より厳 • 注意されまいと思
- しい目。 う。



その話をしたら、班日記に次のような文章があらわれた。

『今日、給食の時間、井上と三尾君が給食を食べ終わったあと、ボール投げをしていました。「ホイノホイノ」とかけ声を出して遊んでいました。やはり先生がいないからかなと思ったら、やはりだれが注意してもやめようとせず、もくもくとキャッチボールをしていました。そのうち田中さんが出て行って二人の中にはいり、「やめて、やめて」とさげびながら追いかけていきました。もう少しで僕も仲間にはいり、いっ

しよにキャッチボールをしそうでしたが、班のみんなが注意してくれたおかげで、キャッチボールをやらずにすみました。こんなふうに、誰にでもすぐ注意できるようになったのは、このクラスが一步向上したんではないかと思います。今までの一組には、こんな風景はありませんでした。ひきしまったかどうかは、わからないが、このふんいきをいつまでもわすれないで、つぎの一步をふみ出そう。』

(原文のまま、3年男子・班日記)

この班日記を短学活の時間にクラス全体で話し合った結果、その後、だれかれのわけへだてなく注意しあうことができ、学級の和が深まっていった。

- ・留意点…班日記に教師の批評を朱書きだけでなく、時には班に直接参加して話し合うことも必要である。

1. 学習活動の拡充

評価表の例 A

短学活自己評価表		No.1		
		A	B	C
1. チャイムと同時に活動できたか。			●	●
2. 自分の責任において行動し、意義ある一日であったか。		●	●	●
3. 自分の意見をはっきり述べ、他人の意見に耳をかたむけることができたか。		●	●	●
4. 自分でよく考え自分のものにし、解決できないところは、友だちに教えてもらったり、先生に質問したりして解決できたか。		●	●	●
5. 問題解決のために話し合い、全体に協力して積極的に行動することができたか。		●	●	●
6. 自分たちのきまりを守り、他人へ迷惑をかけないで気持ちのよい集団生活ができたか。		●	●	●
7. 清掃や給食など責任をもって行ない、規律ある一日となったか。		●	●	●
8. 班長に協力し、自分たちの班の向上のために教え合い、励ましあうことができたか。		●	●	●
9. 他の班と交流を行ない、学級を高めるはたらきかけができたか。		●	●	●
10. 今日のポイントの確認ができ家庭学習の計画がたてられたか。		●	●	●
<反省> 9月20日(月) 朝の短学活は、あまりうまくいかなかったが、帰りの短学活はよくできた。帰りの短学活は、わからない所をなっとくするまでおしえてもらったり、くわしくおしえてあげたりして、いつもより短学活がすむうずいできた。 これからも、うまくできるように心がけたいと思う。		課題メモ 数学 基礎練習帳 37 ①～② ふく習 38 ⑦～⑫ 予習 家庭科 ノートP2～P19 社会科 白地図 P.42		

評価表の例 B

第22週 10月8日 金曜日 天気(雨)

時間	教科	内容	時間	教科	内容
1	社	ワークスタディ	1時間30分	国	基学
2	英	Lesson(2)テスト Lesson(3)テスト	30分 20分	英	Lesson 9 (2) (3)の宿題
8	技	金属加工 タオルハンガーについて			
4	技	〃			
5					
6					

生活記録	0	午前	12	午後	24
		すいみん	朝	学	校
				夕	夜
					短学活

今日は予定よりも早く学習がすんだので、よゆうな時間が出来たため案だった。

短学活の反省

項	目	A	B	C
1	チャイムと同時に活動できたか。	●	●	●
2	短学活に何をやるかははっきりしていたか。	●	●	●
3	短学活ノートをうまく利用できたか。	●	●	●
4	質問されたら、教えることができたか。	●	●	●
5	授業での疑問解決できたか。	●	●	●
6	家庭学習の課題は、計画できたか。	●	●	●
7	短学活の時間は有効であったか。	●	●	●

評価表をとり入れて短学活を行なった結果次のような教師の声があがっている。

- ・短学活が以前より計画的に運営されるようになった。
- ・班員としての自覚が深まった。
- ・班同志の競争意識がみえはじめた。
- ・問題点…評価表に記録することが形式的になってくること。

[短学活ノート]

短学活を効果的に行なうために短学活用ノートを作らせている。

何のために使うか、という教師の問いかけに対して

『それはみんなのためでなく自分自身のためだと思う。ただやればいいというものではない。そんなふうにノートを使うのだったらノートがムダになるだけだ！ ノートに書くことは、ポイント、疑問解決をやって、それから今日あった授業の中から何かえらんで班長かだれかが問題を出す。そしてだいたい1日1ページ程度でまとめる……』

(3年女子・班日記)

短学活は授業と家庭学習との接点であ

るという考えにたつてこのノートを使用させている。また「ノートで考え、ノートで発言せよ」という指導がなされている。

『自習の形であると、やっている者と、やっていない者がいるために、班にノートを一冊つくって記録をとらせるようにしている。また記録を見て評価している。見た結果4割から5割が短学活の時間を有効に使うようになってきている。』

(新任教師の言葉)

『ノートを作ってから以来、多少は、まともな短学活をやらねば記入できないと思ったようで、二学期の始めごろから比べれば、よい方向に向ってきたように思う。』

(教師のこぼ)

〔問題点〕

このやり方は一応定着してきたようだ。しかし、まだ短学活ノートを忘れてくる生徒もみられ、本当に生徒にとって必要だという切実感がみられるところまではいっていない。またその内容面までを評価するところまではいっていない。

(教師のこぼ)

以上のような試みを通して、クラスが向上してきた様子が、次の班日記の文からうかがうことができる。

『いつも自分のことばかり書いているので、今日は私たちの班について。ねえ先生、近ごろうちの班がかわったと思いませんか。近ごろとはいつてもここ2〜3日のことだけど……。田口君かわったでしょう？昨日だって英語のシートやってきたし、今日は今日で社会の時間に新聞持ってきて忘れ物もしなかった。おまけに班ノートはきちんと書いてきたし、ホントにかわったと思いますよ。

私がこんなこと書くななんて生意気ですけどね。でもうちの班の人、みんな田口君がかわったこと喜んでますよ、他人同志の集まりだけど、こういったちょっとのことをみんなが喜んでいてとってもすばらしいことじゃないかな。』

(3年・班日記)

3. 結果と考察

短学活の充実とそこにおける評価活動がひとりひとりを生かし、生き生きとした学級づくりにつながる。こうした観点にたった実践から考えられることをまとめてみた。

(1) 学級を高めるために — 班日記を通して
個人・班・学級・教師に対する問題や気づいたことを具体的に家庭で記入させ、生徒どおしが読み合い、問題を解決していこうとしたのが班日記記入のねらいである。

この日記を通して、学級における望ましい生活習慣や態度について、お互いに考えるようになり、学級の和を深めることができたのはよろこばしいことである。

なかには、まだ自分で問題を見つけることができなくて解説・マンガ・クイズ等を書く生徒がいる。そういう生徒には教師側の、生徒の心をとらえた朱書きで、方向を変える指導をたえず行わなければいけない。

(2) 学習効果を高めるために

— 短学活ノートを通して —

一時間の授業の最後に、ポイント、疑問点を、個々の生徒が短学活ノートに記録することにより、帰りの短学活の時間を有効に使うことができるようになった。また、短学活ノートに記録されていても、短学活の時間内に解決できなかった問題点や、新しく生じた疑問点を記録することにより、家庭学習を効果的にすすめるための手段にすることができた。さらに、家庭学習の中から生じた新たな疑問点を、朝の短学活に結びつける役目をはたすことができるようになった。

このように短学活ノートは、授業 → 帰りの短学活 → 家庭学習 → 朝の短学活とつながる一日の学習場面をつなげる働きをもち、学習意欲や学習効果を高めることができた。

(3) ひとりひとりを生かすために

— 評価表を通して —

生徒の活動に反省がなく毎日が過ぎていったならば、授業における問題の追求・今日のポイントの確認・家庭学習の計画など

について考えることができない。そこで生徒ひとりひとりの活動を生かすために、評価表で一日を反省させ「目標が達成できたか」を評価させてみた。

評価表の記入によって、個人や班員としての自覚の深まり、自信、やる気につながり、学習意欲の高まりとなってきた。また、ひとりひとりが学校生活の習慣を身につけ、短学活を効果的に過ごすことから規律ある一日となり、忘れ物が減り、家庭学習も計画的に行えるようになった。

短学活の評価活動を通して、生徒と生徒、生徒と教師との密なる信頼関係が育ち、きびしさのある生活となった。また、自分を反省し、課題に意欲的に取り組む態度が、生徒ひとりひとりの活動の中にみられるようになったことは成果であった。さらに、短学活と授業と家庭学習との有機的なつながりができ、「今日一日で何を学んだか」をつかむことができるようになったことも大きな収穫であった。

4. 今後の課題

実践を行った結果、次のような問題点がでてきた。

- 短学活ノートに対する教師の共通理解の必要性和生徒への指導
- 短学活ノートにおける個人評価の方法
- 班日記、評価表のマンネリ化を防ぐ指導
- 評価活動の事後指導

今後は、上記の問題をふまえ、人間関係を深めつつ、自ら厳しく学習に取り組む生徒づくりをめざしたい。さらに認知と態度の両面を同時に追求する方向へ、全職員共通理解のもとに研究をすすめていきたい。

第11回全国バズ学習研究集会

ひとりで ころころみるバズ学習

—— 数学の授業方法を工夫・改善するなかで ——

東京都保谷市立保谷中学校

金原 きみ

1. はじめに

私が、バズ学習に興味をもち始めたのは、一昨年、地区の管外研修で愛知県春日井市立東部中学校を、参観した時である。子どもたちが、活発に話しあい、意欲的に学習に参加している様子もみて、私は、すっかり魅せられてしまった。しかも、それが、全職員あげて、学校体制でとりくんでいるとのこと、正直のところ、びっくりした。

本校の実態をみる時、さまざまな考えをもった教師を、同一方向にまとめ、全校体制をくむなど、まさに至難の技である。

私は、ひそかに一人で授業の中にとり入れ、研究してみようと思った。たった、一時間の授業見学をしただけで、バズ学習の理論も持たずパターンも知らない。いわゆる我流である。なんら、型にはまらず、暗中摸索、思考錯誤をくり返す。

ともかく、ころころみてみた。私を、ここまで、かりたてた理由は、次のように「おちこぼれの子」をいかに指導するか、苦心していたからである。

○ 本校の実態

- 数学の学力差は、小学校一年から中学校の理学年まで、大きく開いている。
- 生徒は、学習意欲に乏しく、まじめではあるが、すすんで考えようとならない。
- 本校は、殆んど全員進学希望。父母の学校に対する期待や要望は大きく、特に「数学の力をつけてほしい」の声は「おちこぼれ」の現状の中で、つねに数学科教師に工夫をせまっている。
- 数学科では、「学力差に応じた授業法」を研究テーマにあげ、特に、遅れた子の指導に、苦心し、段階別プリント学習、O・H・Pの活用など、いろいろ工夫していた。

2. 私の方法

○ バス班を作らない

座席を、班ごとにくむのは繁雑である。私は、現状のまま、バス学習をとりいれてみた。班を編成しないバス学習……そんなのあつのかな？ と思いつつ、私は、生徒がどうしても自発的にグループをくまなければならぬように、追いこむ方法を考へた。

○ 全員起立！

課題を示し、全員を起立させ、「さあ、話しあって解いてごらん。わかった人から、座りなさい」と指示する。生徒は、座りたい一心から、いやおうなしに相手を求めて動きまわる。話しあうメンバー人数は、生徒の自由にまかせせる。

○ 班は、自然に編成された

いつもの仲好レグループ、いたずら仲間では課題が解決できない時がある。リーダーを求めて、移動せざるを得ない。人数が多すぎると、話がうまく交流しないので、自然に教人ずつ分れ、回を重ねるごとに、班は徐々に編成されていく。

○ 課題によって、班は流動する

課題の難易によって、班の編成は変化する。課題を解決するために、自分がよくわかるために

班の構成は、流動していった。

○ みんなで わかりよう！

「わからない友達を立たせておくのは、わかった人たちの責任であり、話しあいグループの責任である。」

「聞かぬは、一生の損！ がんばって」私は、遅れがちの子をばげまし、「みんな、わかりよう」を合言葉にして、雰囲気づくりに努めた。

○ バスを深めさせる

答だけを聞いて座る者がいた。私は、指名した子が正しく理解せずに答えられない時は、そのグループ全員を立たせ、再度、話しあわせ、教えあわせた。また、グループで説明させ、表面的なつがみで終わらないように配慮した。

○ バス学習は、訓練である。

私は、我流のバス学習を、授業の中に定着させるのに、一学期間がかった。生徒は、すぐ思ふように動くものではない。課題をえらび、提示をくふうし、たえず、刺戟を与え、マンネリ化を防ぐべく努力した。根くらべである。訓練を重ねるごとに、少しずつ、協同思考が上達し、すいんで課題解決にとりくむようになった。

3. ねらい

私が、当初、バズ学習をとり入れようと思った本音は、できる子を助手にして、遅れた子をすくっていこう、ということであった。しかし、実際に方法を工夫し、研究するうちに、私は、もっと幅広く格調の高いねらいが、その中にあることに気づいた。以下は、私なりにまとめてみたねらいである。

- (1) 進んで考え、解決しようとする主体的な学習態度や意欲を育てる
- (2) 人の意見を聞く態度、自分の考えをまとめ発表する力を身につける
- (3) 協同思考のたのしさを知り助けあう友情を育てる
- (4) わかった喜び、感動を経験させ、知的探求心、思考力、創造力を育てる
- (5) 見切り発車をしないで、全員に理解させていく指導の徹底をはかる

4. 結果の考察

(A) 生徒の感想文

2年E組 39名

感想の内容を、子どもの学力(評定)との関連において分類

効果的だと思う生徒... 85%

[評定 5.4の生徒] 12名

- 友達の考えを聞いて、ハッとする。友達とおしで話し易い。
- 友達に教える時、自分の考えをまとめるので、勉強になる
- わからない点がはっきりしてくる。そのままではさなくてよい
- 全員起立!で、わむ気がさめる。ボケーッとしていられない
- 手を挙げる勇気がないので、私には、小人数の話合いがよい
- あとの先生の説明がよくわかる

[評定 3の生徒] 15名

- 自分の考えを述べあうので、自分の意見をはっきり持つようになる
- 全体の前では言いにくいので、私には、この方法がよい
- わかった人は座っているので、そこに聞きに行ける。何んでも気軽に聞ける
- 起立すると気持ちがひきしまり、ボケーッとしていられない

[評定 2.1の生徒] 6名

- 一人では全然わからないが、教えてもらえるのでよい。
- 友達なので聞きやすい

困ると思う生徒... 15%

[評定 5.4の生徒] なし

[評定 3の生徒] 4名

- 早く座ろうとあせる。恥しい。

〔評定 2, 1の生徒〕 2名

- 答だけ聞く。先生の説明の方がよくわかる。
- 起立するのは 面倒である

(B) 私の観察

生徒が真剣に話しあい、思わず「わかった！」と歓声があがる。など！ どうして！ 友達どおしの追求、発問など、なかなか、てきびしい。自分さえ、わかればよいという利己心、排他的な競争心は、まかり通らぬムードである。

教師の一時的な一斉指導では、このような生き生きとした授業はのぞめまい

また、逃が仲間が、勉強仲間になってきたグループもあり、全体が共に学ぶ 雰囲気になってきた。

(C) 教習部会での考察

- バズ率を固定せず、生徒の自由な話しあいや動きの方が、むしろ自主性、積極性が育つのではないかと。(たゞレ、班編成をした上でのバズ学習を、こころみてはいないので、比較検討したわけではなく、あくまでも感(び)である)
- 課題は、単に答をだすのではなく、考えを交流させられるものがよい。原理、原則をみつける、仮

説もたてる、考え方をまとめる内容が、効果的である。

- 答や結論だけ聞いて、早く座ろうとする生徒に対する対策を工夫したい。
- 全員起立は効果的。子どもの動きがよくわかり、子どもも、早く座るために、一生けん命努力している。
- 生徒どおしの、優越感、劣等感をもくため、学活での協力指導がほしい。

5. おわりに

私の、独創的なこころみは、まことにおそまつではあるが、バズ学習の亜流だと、自認している。パターンに拘束されず、どうすれば、子どもたちが、たがいに伸ばしあえるかを考え、工夫を重ねてきた。バズの先輩諸氏からは、沢山の御批判があることと考えている。

第11回全国バス学習研究集会

学習効率を高める

小集団の活用

豊川市立中部中学校

◆ はじめに (略)

1. 一斉学習と個の変容

教育の目的が個の変容であるからには学習の個別化が計られなくてはならない。だが、学校教育が集団教育である以上、一斉学習は基本形態として考えられるべきで、本来の目的達成のためには一斉学習と個別化を計るための学習との調和が意図されなくてはならない。

○一斉学習における問題点

(1) 教師側の問題

- ① 一律的な扱いになるため個別化への配慮が乏しくなる。
- ② 教師が主導権を持つため教師中心の授業になり易い。

(2) 生徒側の問題

- ① 自己の能力に適合した学習活動ができないので意欲の盛り上がりがなく、無気力になり易い。
- ② 学習活動が一律一斉が多いために個性に応じた活動がしにく

い。

- ③ 相互学習が少ないため、人間性を高める学習活動がしにくい。
 - ④ 相互の意見交換による思考の深化ができにくい。
- など、いろいろな問題点が指摘される。

2. 個別化のための学習形態

一斉学習の欠点を補うための学習形態として次のようなことが考えられる。

- (1) 小集団による学習活動を積極的に取り入れ、個人の参加度を高める。
- (2) 相互の話し合いの場を多く設け思考を促進し、理解を深める。
- (3) 相互作用を多くし、人間関係を高める。

そのためには一斉・小集団・個人の適切な組み合わせが必要となる。

3. 小集団活動による期待される効果

- (1) 学習の効率を高めることができる。

① 話し合い、質問などがし易いため、学習活動が活発になる。(参加度が高まる)

② 理解が促進される。

• いろいろな意見や情報を得ることができるので、よい考えが得られる。

• 話すことによって考えが組織化されたり、誤りの修正が行われるので理解が確実になる。

• 解決へのヒントが得られる。

• 「たずねる」ことができるので、より高次の思考ができる。

• お互いの誤りを精査する働きがあるので、評価または確認ができる。

• 能率的なドリルや練習ができる。

(2) 集団の一員としての個の成長が期待できる。

① 構成メンバーが少ないために、集団への適応が強く要求され、社会的態度や価値感が身につく。

② 個としての活動が要求され、実践を通して自己を理解し、個の成長に役立つ。

③ 相互作用が活発になるにつれて、仲間意識が高まり学級集団の質が向上することにより、全人的発達を期

待できる。

4. 小集団活動の位置づけと活用

学習活動は、学校・家庭を問わず実践され随時・随所で個の成長に参与している。小集団活動は、それらの中で相互にチェックをする1つの節であると考えられる。

この点も考えに入れ、表のような全体計画をたてて見た。

(1) 朝バス

• その日の生活目標を前日の反省に基づき提案・協議し決定する。

• 家庭学習の結果を相互にチェックし授業への構えを整える。

(2) 授業

• 家庭学習課題の整理(問題の有無とその調整・準備)

• 学習課題の提示。

• 課題への取り組みと援助・指導。

各自で(蓄え)

↓
たくわ

小集団で(太り)

↓

全体で(深める)

• 援助の仕方

▽発向によるヒントの提供

▽フィードバック情報の提供

▽まとめ、補足、修正

• 教科委員によって相互評価と定着をはかる。

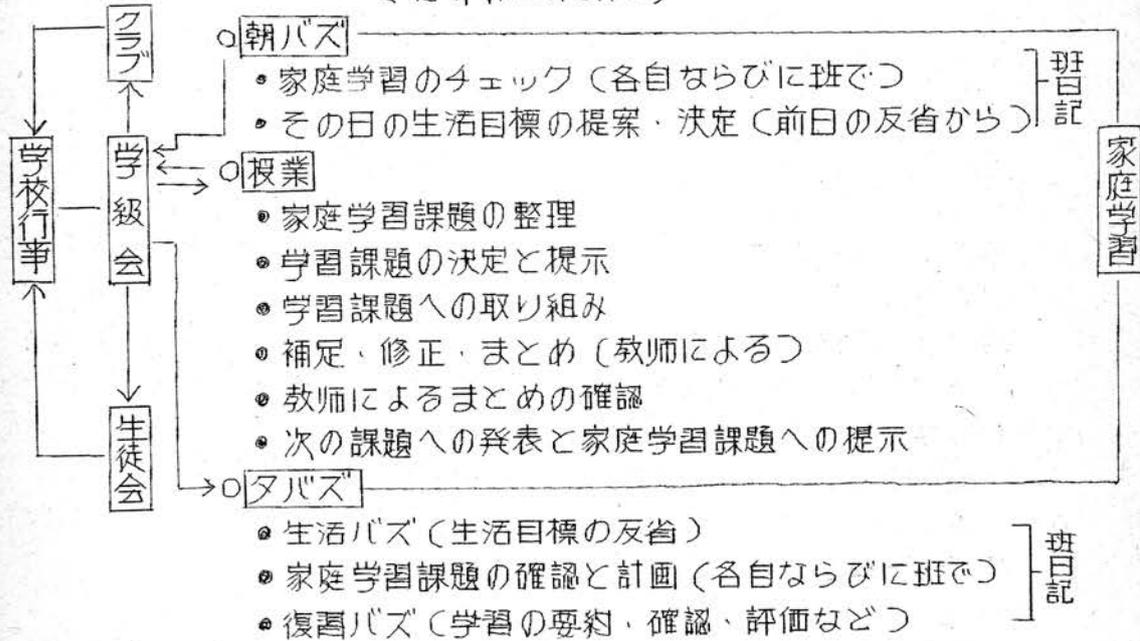
• 次の課題への発展と家庭学習の課題をまとめる。

(3) タバズ

- 1日の授業をふり返って、学習内容の要約・確認・相互評価・習熟など、それぞれの教科委員の指示に従って小集団ごとに実施する。
- 家庭学習の課題の確認と計画を話し合う。
- 生活目標の反省

以上が学校生活における小集団活動の主な位置づけであるが、タバズは学習の成果を確認するだけでなく生徒が集団生活の特性を生かした相互学習が展開できる場として尊重し効果的に運営させたい。

〔指導の全体計画〕



5. 復習バスと教科委員の活動

(1) 教科委員の任務を次の三分野に分ける。

- ① 学習委員
 - 授業の内容を整理し、定着をはかる。
- ② 評価委員
 - 要約、練習などのあとで問題を提示し理解度確かめる。
 - 必要に応じて解説をする。

③ 掲示委員

- 復習バスで整理された学習内容をある時点でまとめ、課題形式の壁掲示をつくる。

このように教科委員の仕事を明らかにし積極的に進めることによって学習活動も高度なものになることが期待できる。

(2) 技術面の指導

① 班長の選出

- ・まとも役・世話役として適任者を出させる。

② 話し合いの方法

- ・対話が話し合いの基本である。
(対人法)
- ・隣接法
- ・自由会話法

③ 発問の仕方

- ・記憶の確認のとき
『---について聞いて下さい』
- ・理解の確認のとき
『---を説明して下さい』

④ 聞き方

- ・質問しながら聞く。
- ・要点をメモしながら聞く。

⑤ 話し方

- ・内容、目的、根拠、方法を確認して話す。
 - ・ノート・メモ・小黒板・資料等によって話す。
 - ・要点をおさえて順序よく話す。
- などの指導を加えて、効果的な運営とその成果を期待するものである。

(2) 教材研究がなされていること。

- ・適切な課題であること。
- ・課題の提示の仕方。
(自分の問題となること)
- ・授業の進め方。
(知識獲得が、理解が、問題解決が、技能の獲得が、)

(3) 課題への取り組み方

- ・個人・小集団、一斉の活用
- ・思考操作の仕方。

(4) 学習訓練がなされていること。

- ・一般的な学習習慣
- ・相互作用の仕方の訓練

(5) 評価が行われること。

- ・目標達成状況を常につかんでいること。
- ・指導の中に評価が含まれるべきである。

(6) その他

7. むすび

6. 基本構想が効果をあげるための条件 (全体計画)

(1) 学習集団の質に左右される。

- ・意欲的な雰囲気であること。
- ・学級が機能的な集団であること。
- ・個があって協同できる集団であること。
- ・凝集性の高い集団であること。